
未来の跡

ぱずる

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の跡

【Nコード】

N8747I

【作者名】

ばずる

【あらすじ】

一番最初の作品です。ジャンルは学園。

プロローグ

ふと——意識を凝らす。

そこは淡い世界。

すべての色素が薄く、しかし、美しい。

その世界の中に家がある。そして、その家の前に停まっている一台の車。よく見るとそこには、少年と少女が立っていた。

「しばらく、離れちまうな」

人のよさそうな少年が口を開く。しかし少女は答えない。

内心の喪失感と、悲しみと、涙を堪えたような表情をしている少女。彼女には、可憐という言葉がよく似合う。

そこに温かい風が吹き、少女の髪を揺らす。季節は春らしく、遠くに見える山には桜の色がある。

少年の発言や様子からして、どうやら彼は春によく行われる行事——引越しをするようだ。一向に晴れやかな表情を見せない少女に向かつて、少年は言葉を紡ぐ。

「そんな顔すんなよ。また会えるって」

その言葉に、少女は不安げな表情で問い返す。「本当？」

「ああ、きつと」

その言葉に少女は笑顔を浮かべ、少年も笑顔になった。例えその言葉が、なんの根拠もないものだとしても。

そうしていると一人の女性が歩いてきた。少年に近づき、告げる。「そろそろ、行くわよ」

その女性はどうかやらの少年の母親のようだった。母親は少女の方を向き、

「じゃあヨウちゃん、また会いましょうね」慈愛の表情を浮かべて言った。

「……はい」

母親は少女に挨拶をすると、車に乗り込んだ。それに気づき、少

年も車へと歩き出す。

「じゃあ、またな」

「うん、またね」

少女は名残惜しそうに頷く。その表情に、少年への疑いの念は全くといっていいほど映っていない。少年は車へ乗り込んで窓から顔を出し、少女の顔を自らの記憶に焼きつけるかのように、真っ直ぐな眼差しで見つめた。

すると少年が乗り込むのを待っていたかのように、エンジンが始動した音が響き渡り、車が準備を終えたのを告げる。その音を聞くと同時に、少年は口を開く。その顔は、必死に感情を抑えていて、それでいて、笑顔だった。

「ヨウちゃん！」

「なに？」少女は答える。

「これはドラマの受け売りだけど……」

少年の言葉を待たず、ゆっくり走り出す車。それに合わせて少女も歩き出した。

「今度会うときは——」

少年は口に手を当て、大声で叫ぶ。

「——」少年の言葉は、なぜか聞き取れなかった。

車のスピードが上がる。それに合わせて少女は走り出す。少女の瞳は、次第に濡れ始めていた。

「——」

少年の声に、少女は言葉を返す。

「うん、約束だよ！」

「ああ、約束だ！」

ようやく少年の声が聞こえる。車はさらに速度を上げていく。

「カズくん、私、約束忘れないから！」

叫ぶ少女。しかし車は走り去ってしまう。一人残された少女は泣き崩れ、その輝く瞳から雫をこぼして、車が走り去った道をただただ、見つめる。

「ひつ……約束だよ、カズくん……」

少女は泣きながら、一人、呟いた。

それは、別離の瞬間だった。決意の場所だった。

そして、永遠の記憶のはずだった。

すると世界を構成していた色素が、急速に薄くなり始める。今の

出来事を、儚く溶かすように。

やがて世界は光に満ち、そして、暗転した。

その約束は、果たされるのだろうか――。

第一章

四月八日、午前七時。

「う、うん……」

そこは室内。声の主、戸田葉月とだはづきは、朝の緩やかな眠りから覚めた。「はあ……起床時刻かあ……」

葉月はベッドの上で体を起こし、辺りを見回す。首を回した瞬間、彼女の肩の辺りまである漆黒の髪が舞った。

その部屋にはベッドの他に学習机、タンス、パソコンデスクがあった。どこも綺麗に整頓されており、ピンクを基調として可愛らしく飾られていた。そして葉月は、今見ていた夢を思い出す。

（またあの夢か……一体なんなんだろう。夢の中に出てくる二人、誰だかわかんないし、途中声が聞こえないし……謎）

葉月はこの四月に引越してきたばかりだったが、以前の事故から回復して以来、同じような夢を何度も見ていた。葉月は、この夢の意味がわかれば今の自分の状況が改善されると思っているが、何度見ても夢の内容は同じ。夢の意味など、わかるはずもなかった。また、わからないならわからないままでいいと、そう思っている自分も確かに自覚していた。

（でも、いよいよ明日からは……）

四月に引越してきたばかり。その事實は、葉月が高校を転校したことを意味する。今までの全てのものとけじめをつけ、前向きに、もしくは逃げ出すように、ここへやってきた。

（大丈夫、だよな）

誰に対するものかわからない疑問。そこにあるのは、希望でありながら不安であり、期待でありつつも焦燥だった。

（私、一歩先にいけるよね）

自分に言い聞かせるように、流れるような髪を揺らしながら、葉月は何度も頷く。そうしていないと、不安に飲み込まれてしまいそ

うであるからか。

「よし、そんなことは置いて、行動開始だっ！」葉月はベッドから降り、着替えを始める。

発した彼女の声は、明るかった。

辺りを見渡すと、東に大きな山が見える。それは火山——桜島だ。ここは鹿児島県。日本の中でもかなり南に位置しているが、魅力としては沖縄県に大きく劣っている。最近新幹線の開通により交通の便はよくなったが、そう何度もこような場所ではない。その中にある二車線の小さな国道。そこから少し小道に入ると、一軒の家があった。その家の中、居間と呼べる場所で、テレビの音が響いている。

《他県では交通事故の後遺症として、俗に言う記憶喪失となった例もあり……》

テレビの前で、一人の青年がトーストを片手に口を開く。

「そんなことあんのかよ……辛いだろうな」同世代の男性よりも少し長い髪の毛の下、人のよさそうな顔をしている。

言いながらその青年——橘和磨は、日本人らしい茶色っぽい黒色の瞳を、足音がした階段へと向けた。

「やっとお目覚めかよ、遅いだろ」

「ああ？ まだ朝じゃねえか」下りてきたもう一人の青年が呟いた。「お前の朝に対する認識を疑う」

言いながら、和磨は壁に掛けてある時計を見る。時刻は午前九時。「はいはい、そりやどうもねえ」

頭を掻きながら、寝癖だらけの短髪に、どこか和磨と似た顔を持つ男性——橘明はフローリングを歩く。

「俺は明日から学校だつてのに……まったく」

日付は四月八日。和磨の通う高校、鹿児島北丸高校は、明日が入学式であり、始業式の日でもあった。

「お前もついに高校二年生か。ま、気をつけるんだな」

「なにをだよ？」和磨は尋ねる。

「また今度教えてやるさ」曖昧な笑顔を浮かべながら、明は和磨の隣に腰を下ろした。

「はあ……そうかい」

当然だが、和磨にとつて明は兄にあたる。和磨の見る限り明は自堕落な人間であり、家の中では生活習慣が悪い。しかし、恋人もいるという話なので、和磨は不思議でならなかった。

（こんなやつのだこがいいんだか……。世の中には、物好きな人間もいるってことだな）

和磨は明を見ながら思った。しかし、家族と接しているとき以外の明を見たことはないのも、もしかすると人当たりはいいのかもしれない。

「なに見てんだあ？ 気持ち悪い……」細い眉をひそめて横目で和磨を見ながら、明は毒づいた。

「いや、能天気なやつだと思ってな」

そんな兄弟のやり取りには関係なく、テレビは音を出し続ける。

《いわゆる記憶喪失は、なにかきっかけがなければ治らないことが多く……》

すると、目の前のコップに入った野菜ジュースを飲み干し、明は言う。

「お前の周りの人も記憶喪失になったりするかもな」

「……！」

その言葉で、和磨の頭は白熱した。

「兄貴、そんな不幸になるようなこと、冗談でも言わないでくれ」

極めて静かな、しかし有無を言わせぬ強い口調で和磨は言う。

「すまん、悪かった」

怒りを覚えたとき、和磨は怒りに任せて乱暴な言葉を吐いたりしない。しかし確実に怒気を含んだ喋り方をするので、それを明は理解しているようだった。

「だが和磨、記憶喪失で不幸になるとは限らないぞ……っ」と

そう言つて明は立ち上がり、洗面所に向かう。立ち上がった彼の顔は、とても高い位置にあった。身長は百八十センチを超えているだろうか。

「うん？」

明の言葉に疑問を覚えた和磨だったが、もう隣にいない彼に疑問を追及する術はない。そのまま和磨はその髪を揺らして、テレビに視線を向けた。

《周りを新しい環境にして、記憶喪失以前の生活から離れて暮らす人もおり……》

テレビは相変わらず、言葉を吐き続けていた。

そこは、賑わう町。

静かな田舎か、騒がしい街かの差が激しい鹿児島で、そこは明らかに後者の特徴を持つ場所だった。人は多く、建物も多い。

「はあ、春休みももう終わりね」

その人混みの中、一人の女性が言う。背中まである漆黒の髪の毛を揺らし、整った顔に笑顔を浮かべている彼女の年齢は、十代後半程度だろう。

「確かに」その隣で並んで歩いていた、短髪の青年が口を開いた。大柄な彼の年齢は、彼女とさほど変わらないように見える。

「ま、久しぶりに会う奴もいるし、いいじゃねえか」

「それもそうね」女性は頷く。

二人は笑顔を浮かべ、たくさんの人通りを避けながら歩いていく。

「今日は楽しかったわ。ありがとうね、進一」

進一と呼ばれた青年——川上進一かわかみしんいちは、その強面の顔に笑顔を浮かべて頷き、言葉を継ぐ。

「ああ、いいつてことよ。舞、俺も楽しかったしな」

並んで歩く女性——鎌田舞かまだまいは、俯く。その大人っぽい顔には、困ったかのような笑顔。二人は春休み最後の一日に気晴らしをするため、街で遊んだのだった。

そうして歩きながら、二人は大きな建物の横を通り過ぎていく。その建物の電光掲示板には午後六時四十分と表示されていた。日も落ち始めているため、所々で電飾が輝き始める中、二人は駅に着く。鹿児島島の薩摩半島を南下するための、指宿枕崎線が二人の目的だ。

「なあ、あいつ、元気でいると思うか？」

「あいつ？」舞は不思議そうに言葉を返した。

「ほら、和磨だよ」

言いながら二人は電車へ乗り込み、席に着く。春休みということもあってか、あまり人はいなかった。

「ああ、彼なら大丈夫でしょう？」

「どうだか。だってほら、あんな性格だぜ？」

進一の言葉に、舞は苦笑を浮かべる。「ずいぶんひどいじゃない」「そうか？」

《この電車は、喜入行き……》進一の笑い声は、車内アナウンスにかき消された。

「でもほら、彼もいるでしょ？ あなたたちと仲良しの——」

《ドアが閉まります、ご注意ください》

続く舞の声は、ドアの閉まる音で聞こえず、そのままゆっくりと電車が動き出していく。

その電車の窓からは、笑い合う二人の姿が見えていた。

「稔ちゃん、お風呂あいたわよ」

「あーい、ありがと」

暗い夜の闇の中、そこだけ大量の明かりを放つ建物がある。それはマンションであり、階数や見た目から高級なものであることが伺える。

そんなマンションの四階。ある一室の中で上原稔は、パソコンと対峙していた。

「更新完了、と」

何事か作業を終え、人より長い髪を揺らして席を立つ稔。身長が

百六十センチほどの体を動かし、着替えを準備して浴室へと向かう。鏡に映った、高校生と呼ぶにはまだ少し幼い自分の顔を見ながら、稔は体を洗い終えた。

（明日から学校……か。お父さんやお母さん、お婆ちゃんのお陰で、高校二年生になれたんだ）

浴槽に浸かり、稔は物思いにふける。体を伸ばし、黒色の瞳を閉じる。

（おかげでたくさん友達もできたし、これからもがんばらなきゃ）

風呂場の中に常備された、時計の秒針の音が響く。時刻は午後十時。

（みんな元気にしてるかな。また、仲良く時間を過ごせたらいいな）
自然と笑顔になる稔。浴室では、秒針が変わらず時を刻み続けていた。

とあるビルの屋上、常人ならば絶対に足を踏み入れないであろうそこに、一人の男性の姿がある。身長は百八十センチ前後、短くはないがあまり長くもない髪は、白銀に染め上げられて逆立ち、流れる風に揺れていた。

「私の名は九天。^{くてん}一つとして同類のない存在」

誰に対してのものかもわからない呟きを、九天は虚空に向かって吐いた。

「いつからだろうな、一つのものしか見えていなかった私が、こんな何処^{いずこ}にでもある日常に目を向けるようになったのは」

九天の眼下には、慌ただしく歩く人の姿や、狂ったように流れていく大量の自動車がある。

「変わらず動き続ける時間の中、若者たちは自分の時間を過ごしていた」

流れていく人の姿を慈しむように、もしくは蔑むように、九天は言葉を続ける。

「何十億という人間が生活しているこの世界で、世界に対してあま

りにも小さな若者たちは、精一杯に生きていた。自分という存在が世界に与える影響など、ほとんどなくとも」

言い終えると九天はその風景に一瞥し、ビルの屋上から飛び立つ。「そして世界は回り、夜は更^ふけていく」

そのまま落ちるかのような動作だったが、九天の姿はいつの間にか消えていた。彼にはまるで、人の世の理^{ことわり}が当てはまらないのかもしれない。

夜の街は、いつも通りに時を刻んでいた。

第二章

辺りに踏み切りの警告音が響く。空は晴れており、気持ちのいい朝だった。

踏み切りの前、電車の通過を待っている青年がいる。着ている服からして、学生のような。彼の腕に巻かれた時計は七時二十分を示している。

「よっ、元気にしてやがったか？」

いきなり声をかけられ、青年は不審な表情を刻みながら振り向く。

「なんだ、川上か」

「なんだとはなんだよ」声をかけた青年——進一は、その強面の顔を緩ませもせず和磨に向ける。

「いちいち特別な反応をしていたら、身がもたないさ」

「なんだあ？ 朝から相変わらずな奴だな。もっとう、はしゃいでいるかと思つてたのによ」

「新学期早々から勘違いお疲れ様」

あからさまにため息をついてみせる和磨。冷めた言葉で応対している彼だが、その顔に不快感はなかった。

「ていうか、川上はやめろっていつも言ってるだろ」苦笑しながら、進一は言う。

「お前をどう呼ぶかなんて、俺の勝手だろう」

二人の前を、電車が通り過ぎていく。その電車の発する大きな音に、二人の会話は一時途切れる。

「それにいつかは名前で呼ぶって約束しただろ」

「それは、そうだけど……」

進路を遮っていた遮断機が上がり、二人は歩き出す。

日本の桜はもう開花している時期だったが、まだ春と呼ぶには肌寒い日。心なしか、背を丸めて歩いている者もいるようだ。

「川上、春休みは充実してたか？」当たり前障りのない話題を和磨は

口にする。

「おう、おかげさんでな。お前は？ 風邪引いたりしてなかったか？」

「ありがとな、大丈夫だ」

和磨と進一は高校一年生からの友人だ。高校という新しい環境のもつ雰囲気呑まれそうになっていた和磨に、初めて声をかけてきたのが進一だった。彼は過去のそのとき、こう言った。

『よう、しけたツラしてんな』

高校生活で初めてかけられた言葉が、周りの空気を全て吹き飛ばしたのを、和磨は今も覚えている。そんな進一が、驚くべき言葉を発したのは、高校生活が三ヶ月ほど経った頃だった。

『和磨、俺の親友になってくれねえか』

照れもせずに進一は和磨に言った。お前は付き合いやすい、話も合うしな、と。そんな言葉を今までかけられたことのなかった和磨は、内心の照れをなんとか隠して承諾したのだった。これからは下の名前で呼んでくれという進一の申し出を、時がくればそうすると断ったのも、内心の照れからだった。

進一はその見た目からもわかるように、さっぱりした性格の持ち主だ。それゆえ和磨も付き合いやすく、今の関係となっている。また、時々見せる相手への繊細な心遣いも進一の魅力のひとつだった。そういった性格だからか、異性からはそこそこの人気があると、和磨は周りから聞いていた。

（まあ、納得だけど）

和磨が考えごとをしているうちに、鹿児島北丸高校が見えてきた。学校の敷地内へと入っていく人混みの中に、和磨は見知った顔を見つける。

「おい稔、元気にしてたか？」

気づいたときには進一が声をかけていた。稔はこちらに気づき、歩を止めて二人が近づくのを待つ。

「二人ともおはよう。僕は元気だったけど、二人こそ元気にしてた

？」

稔は笑顔で言う。三人は教室へと向かう。

「おうよ」片手を上げて進一は答える。

和磨の方は、「まあまあだな」と、声だけで答えた。

「二人とも、返事の仕方全然変わんないね」

稔とも一年からの付き合いで、和磨と進一と稔はよく一緒にいた。和磨は個人的に、稔の周りの人間を大事にする姿勢が好きだった。

あるいは正確に言うと、自分に似たものを感じているのかもしれない。進一も稔とは話が合うようで、こんな関係がずっと続けばいいと、和磨は思っていた。

「まずは担任と顔合わせだな」三人の中で一番背の高い進一が言う。

「ああ」身長が百七十センチくらいの和磨は、少し見上げる形で進一に答える。

三人が歩く学校の敷地内には騒がしく、春の匂いが満ちている。

教室に入ると、見知った顔が並んでいた。皆、友人との久しぶりの時間を楽しんでいるようだった。

「おはよう、仲良し三人組さん」

そう言って大人びた微笑を浮かべた顔を和磨たちに向けたのは、舞だった。

「よっ」進一は答える。

和磨は「ああ、久しぶり」と顔を向けて言い、稔の方は実年齢よりも子供っぽい笑顔を浮かべ、「おはよう、鎌田さん」と答えた。言いながら三人は荷物を置く。

「みんな変わってないわね」舞は和磨に向かって言った。

「人間はそうそう変わるものじゃないさ」舞の言葉に、和磨はわずかに笑いながら答えた。

舞は高校一年の途中で転校してきた生徒だった。常に落ち着いていて、何事も的確に本質を捉えているような人間だ。そのため周りからはさばさばした生徒だと思われるが、喋ってみるとそう悪い性格でもない。そのため、一部の男子生徒からは人気があった。

「グレてなくて安心したわ」

「あはは、それはないよ」稔は笑いながら言う。

対する舞は、背中まである髪を揺らしながら、ふふ、と静かに笑い声を上げる。

「ああ、本当、グレてなくてよかった。それは俺も同感だ」わざとらしく横目で和磨を見ながら、進一が言った。

「てめえ、誰に言ってるんだ？」和磨は進一に向かい、温度の低い声で言い放つ。

それはただ、穏やかな時間だった。

『――』

チャイムが鳴り、皆が席に着く。すると教室の出入り口から男性が一人と、見知らぬ女生徒が一人入ってきた。男性の方は河野――社会科を担当している教師だった。どうやら彼が、一年間和磨たちの担任を務めるらしい。

女生徒の方は、周りの女生徒と同じ制服を着ていることから、この学校の生徒だということがわかる。肩まである髪はよく手入れされており、黒色だ。身長は百六十センチ前後で、肌の色は白い。顔にはわずかな不安の色があり、全体的に儚い印象を受ける。

（なんだ、この感じは……どこかで会ったことあるのか……？）

会ったこともないはずの女生徒に、和磨は奇妙な既視感を覚えていた。なにか、とてつもないことを見落としているような気がして、和磨は懸命に考える。

しかし、記憶を手繰り寄せても、該当するような人はいない。そうしているうちに河野が口を開く。

「俺が一年間このクラスを担当する河野だ。で、こっちが今度事情があつてこの学校に転校してきた、戸田だ」

河野の声を皮切りに、生徒たちが少し騒ぎ始めた。

教室の様子に、葉月はいつそう不安を強くする。

（私、変に思われてるのかな。まあ、仕方ないけど……）

高校を転校するということは、世の中ではそう頻繁に行われるものではない。そのことを理解はしているが、やはりそれだけではやりきれない葉月は、周りの奇異の色を含んだ視線に耐える。

「色々わからないことがあるだろうから、みんなで助けてやってくれ」

そう言って河野は、葉月の肩を叩く。

葉月は、小さく震えた。

「じゃ、戸田。みんなに挨拶をな」

河野が告げると、教室にいる者の視線が一斉に葉月に向けられる。その視線に体を硬くした葉月は、予想はしていたが、緊張してしまっている自分を自覚した。しかし、ここでミスをするわけにはいかない。

意を決して葉月は言葉を紡ぐ。「初めまして、戸田葉月といいます」

やっと振り絞って出た言葉は、あまり緊張を含んでいなかった。そのことに安堵し、葉月は教室内を見回す。すると、皆が自分の話を聞こうとしてくれていることがわかる。葉月はそれがありがたかった。

「この四月に、宮崎県から引っ越してきました」

言いながらふと、一人の男子生徒が葉月の視界に引っかかる。

（あれ、どうしたんだろ、私……）

その男子生徒は、男にしては少し長い髪に囲まれた人のよさそうな顔の中、そこにある黒い二つの瞳を真っ直ぐ葉月に向けている。その目には動揺と、なにかしら強い意志が感じられる。

「新しい環境なので、皆さんに迷惑をかけてしまいかもしれませんが……」

ななに動揺しているというのだろうか。

葉月は、自分がなぜ今もまだ、彼を視界の中に捉えたままにしているのかわからなかった。そしてふと、思いつく。

（もしかしたら、私を知っている人なのかも……）

葉月は自分の今置かれている状況を思う。もしかすると、自分の失ったものを取り戻させてくれる人かもしれない、とも。しかし、世の中はそんなに上手くいかない。

「これから、よろしく願います」

言い切ってから葉月は思う。そう、世の中は甘いものではない。

葉月は大きなものを失ってしまった過去がある。そのとき葉月はそのことを知ったのだ。そして心の中で考えていたことを自分の中から消し去った。挨拶の締めくくりに葉月が頭を下げると、皆の拍手が聞こえた。

（世の中にあんまり期待したら、後が辛いもんね……）

「じゃあ戸田は……あそこの席に座ってくれ」

そう言って河野が指差したのは、先ほどの男子生徒の隣。葉月は指定された、新しい自分の場所へと向かう。

（ついに始まるんだ、私の新しい生活が……）

期待と不安が混ざり合った気持ちのまま、葉月は席に近づき、

「よろしく」

和磨の隣の席に座った。

（まじかよ、えらいことになった……）

戸田という女生徒について考えている間に、いつの間にか状況は変化し、今や彼女は自分の隣に座っている。先ほどの自分の中のもやもやを解決している暇など、和磨にはないようだった。

内心の動揺を全て隠して葉月の方を向き、できるだけ柔らかい表情を心がけて和磨は言う。

「ああ、よろしく。俺の名前は橘和磨。転校してきたばかりの心細さは理解しているつもりだから、困ったことがあればなんでも言うて。遠慮はなしで」

なんとか、言い切った。そのことに和磨が安堵していると、彼女は心から安心したような表情になり、

「ありがとう」

こちらを信じてくれるような声音で告げた。
その表情を見て、声を聞いて、和磨は思う。

この人にも幸せでいて欲しいと。この人を裏切ってはならないと。しかし、和磨には彼女を見てからの自分の動揺の理由がわからなかった。それは彼女と話したことで、いつそう強くなった気がする。そのことについて、和磨は再度詮索を開始しようとしたが、

「じゃあ始業式があるから、全員体育館へ移動だ」

河野が口を開いた。皆が席を立ち、移動を開始する。

「それじゃ早速、体育館まで案内しようか」

和磨は詮索を中止して立ち上がり、葉月に向かって言う。

「うん、お願いするね」

答えた葉月が立ち上がるのを待っていると、近くに座っていた舞が、

「あら橘君、もう彼女を狙ってるの？」問ってきた。

「人の親切に水を指すような発言はやめてくれ……」

うんざりした口調で言う和磨を見、舞はからかうように笑う。それから葉月の方を向いて笑いかける。

「私は鎌田舞。見ての通りの同性。よろしくね」

「うん、よろしくお願いします」

そう言っ葉月は深く頭を下げる。それと同時に葉月の髪が肩からするりと落ちる。そうしていると、

「始業式……仕方がねえから行くか」

「うわあ、すっごい嫌そう」

進一と稔も近づいてきて、葉月と挨拶を交わす。

「よう、新入り。俺は川上進一、よろしくな」

「新入りはおかしいでしょ……僕は上原稔です。よろしく」稔は苦笑しながら言う。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

葉月は笑顔で答えた。

皆は席を立ち、体育館へと歩き出す。新学期が始まったばかりの

校舎は、春休みを利用して掃除をしたのか、和磨の記憶に残る校舎より綺麗で、廊下にはワックスまでかけられていた。

「そういえば戸田、ひとつ聞いていい——うがっ」

廊下に人が人の頭を叩く快音が響く。被害者は和磨だ。彼は頭を押さえ、何事かうめいている。

「おい川上、新学期早々何事だ？」恨みを込めた声で和磨は喋る。

その言葉にため息をつきながら進一は言う。「初対面でいきなり呼び捨てかよ貴様」

（そういえば、確かに……）

「あ、いいよいいよ。気にしないで」

しかし本当に気にしていないような表情で、葉月は言う。

（けど今のは俺のミスだな……川上、フォローありがとう）

和磨は苦い気持ちになる。確かに今のはまずかった。しかし葉月は気にしないでと一度言っただけ、葉月の気遣いを尊重してあえて呼び捨てのまま続ける。

「じゃあ戸田、どうしてここに引っ越してきたんだ？」

葉月の紹介をするとき、河野は事情と言っただけで明確な説明はしなかったのを和磨は覚えている。それがもし本人にとって辛いことでも、これから彼女の味方であるためには知っておかなければならないと、和磨なりに思っただけの質問だった。

「聞く？ あんまりいい話じゃないけど」

葉月は少しだけ苦しそうな表情で言う。

「そうなの？ 戸田さんが嫌なら話さなくていいんじゃない？」少し悪くなった雰囲気をかき消そうと、稔が声をかける。

彼なりに気をきかせたのだろう。やはり稔は他人を大事にする。しかし、この場合は不適當だと和磨は思った。

「いや、辛い内容ならなおさらだ」

「ああ、そうだな。そういうのは早くすっきりしといたほうがいいぜ」

進一も同意してくれた。やはり進一も相手のことをよく考えてい

る。

「うん……」

葉月は少し迷うような表情を見せる。この場の空気が悪くなることを心配しているのだろうか。が、彼女は精一杯であるう笑顔を浮かべて、意を決したように口を開いた。

「じゃあ、話すね？ 私……」

しかし、やはり葉月の表情は曇る。それほど辛いのだろうか。

「記憶喪失なんだ」

つい言ってしまった。やはり、場の空気が凍りつくのがわかる。

しかし、和磨たちの優しさは嬉しかった。そんな素直な優しさに触れたのは久しぶりだった。だから――。

（だから、甘えちゃったのかな）

「どういうことなの？ 記憶喪失って、なにか原因がないと起きないわよね？」

舞が尋ねてくる。そこには自分を心配してくれている表情があった。

「私ね、前に住んでた宮崎で交通事故に遭っちゃったんだ。外傷はほとんどなかったんだけどね、頭を打っちゃって……事故当日以前のことを忘れちゃったんだ……」

「それで、どうして引越しをすることになったの？ 記憶をなくす以前の状況の中にいた方が、記憶って戻りやすいんじゃないの？」

稔が横から顔を覗かせた。

稔の疑問はもっともだ。普通はそう考えるが、葉月は違った。

「ねえ、忘れてしまったことって、思い出さなきゃいけないのかな……？」

「そりゃあ、絶対思い出さないとイケねえものでもねえけどよ……」

戸惑った顔をする進一。無理もない、葉月は自分でもこの考え方は特殊ではないかと思うほどだ。そう思いつつも、葉月は自分の考えを言葉にし続ける。

「人の運命ってわからないじゃない？ 私は記憶をなくしたからって、必ず不幸になってしまうとは思えないんだ」

ずっと黙っている和磨が気にならないでもなかったが、葉月は続ける。

「これをいい機会だと思って、自分の周りの環境を変えてみようと思っただ」

「それで……引越しを？」

葉月は舞に向かって頷く。

「親に言ったらね、がんばってみなさいって言うてくれたんだ」

「そっか……でも、辛い？」

稔が葉月の顔を覗き込むようにして言う。和磨より長い稔の髪が、重力に引かれて下を向く。

「うん……でも、先へ進むって決めたんだ」

「そうか、まあ、無理しない程度にがんばれよ」進一が笑みを見せつつ言った。

「うん。みんな、話聞いてくれてありがとうね」

救われる思いだった。こんなにも、周りに人がいてくれてよかったと思ったことは過去にない。胸の内にあった不安がいつの間にか溶けていたことに、葉月は気づいた。

（この人たちとなら……やっていけそう）

葉月は自分の幸福を噛み締めながら、ずっと黙っている和磨に話しかける。

「橘君？ さつきから喋ってないけど、どうかした？」

「うん？」

和磨は我に返った。

「いや、悪い、なんでもない。戸田、辛いときは誰かに相談しろよ？」

「うん、ありがとう」

和磨は自分の心情が声に出ていないことに安堵しながら、思う。

（記憶をなくしても必ず不幸になるとは思えない……）

葉月は確かにそう言った。先へ進むと決めた、とも。

記憶をなくせば不幸になるのではないのか。もう、いらないのか、なくしてしまったものを、取り戻そうとは思わないのか――。

和磨は混乱していた。目の前の人は、記憶をなくしながらもその記憶に固執していない。それを理解できないわけではない。そういう道があることは、この前のテレビ番組でも扱っていた。しかし、和磨は納得がいかなかった。だが、本人が決めたことだ、口を挟むことではないとも思う。

「おい、どうした和磨。顔に似合わない難しい顔して」考えていると、進一に皮肉を言われた。

「余計な言葉が聞こえたが？」

「いやいや、気のせいだろう？」

進一の言葉に、現実に戻る和磨。どうやら自分の思考はだいぶ飛躍していたらしいと、和磨は自覚する。

（ま、こんなことはいつでも考えられるし）

一同は体育館に到着し、自分のクラスの場所に並ぶ。

「ねえ橘君、また校長の長い話を聴くのかな？」

若干表情を曇らせながら、稔は言う。対する和磨は、「ああ、そうかもな」と、苦笑しながら相槌を打つ。しかし、和磨はこういうときの話をしっかり聞くようにしている。

決して自分にとってマイナスにはならないからだ。

昔は和磨も稔のように、こういう話を聴くのは面倒だと思っている人間だった。しかしある日、少し世の中に名を知られた人がやってきて、講演を行った。和磨は個人的に興味があったので、そのときばかりは真面目に聞いていた。そして、あることに気づいた。

この人は、自分たちのことを思っただけで喋っている、と。なぜ自分は今まで気づかなかったのか、と。

今回ここで会ったからという理由ではなく、人として、人生の先輩として。自分たちに話をしてくれる大人たちは皆、例外なく誠意

を持つて大事なことを伝えようとしてくれていたのだ。それなのに自分は軽視し、無駄だと決めつけていた。

それから和磨は、自分の人生を豊かにするため、様々な話をしっかり聞くようになった。

『準備期間である春休みも終わり、今皆さんは新鮮な気持ちでいることと思います』

和磨が物思いにふけっていると、校長の話が始まった。体育館に設置されたスピーカーが、大音量を建物の中に響かせる。

『私が皆さんにお願いすることは――』

校長の話す内容は、進級した和磨たちへの、あるいは新しく入学した高校一年生への激励だった。

講話を行う校長の隣、黒く長いコートを羽織った、白髪、長身の男の姿がある。その男は明らかに不自然な場所に立っているが、そのことを気にする者は誰一人としていない。

「気にするな。語り手であると同時に、私はこの世界では認識されていない」

するとその男性――九天は、誰に話しかけるでもなく、口を開いた。

「若者たちは出会いを経験し、ある者は困惑し、ある者は感謝した」
そう言うとき九天は校長が講演をしているステージから降り、生徒の列の間を歩きつつ、謡うように言う。辺りには校長の声と共に、九天の低い声が響き渡る。

「始めから微妙にずれている歯車。今は気遣いという名の潤滑剤で、なんとか噛み合っていた」

そして体育館の出入り口に到達する。その後すぐに彼は、固く閉じられているその金属製の扉に手をかけた。

「ずれている歯車を無理やり噛み合わせる――その弊害に気づかずに」

扉を開きながら九天は振り返る。そこには一人の男性の話を数百

人の若者が聞いているという、見方を変えればなにかの布教活動に見えなくもない光景が広がっている。九天はその光景を一瞥し、

「そして変わらず、時は流れる……」

片手で軽々と金属製の扉を開き、体育館から足を踏み出して外へと歩き出した。

響いた扉の閉まる音に、反応を示す者はいなかった。

第三章

橘家の居間で、和磨はカレンダーを見る。日付は四月二十一日、土曜日だ。週休二日制が導入されて久しいが、その恩恵のおかげで、和磨は長閑な休日のどかを過ごしていた。

週休二日制に代表されるゆとり教育は、賛成する者と反対する者が今でもはっきり分かれている。しかし、和磨はどちらの言い分も正しいと感じており、世の中によくある一長一短の制度だと認識していた。最近、学生の英語のヒアリング能力が向上したというニュースがあつたが、代わりに国語の能力は落ちていたらしい。英語の学習方法は、近頃実践主体のものへと変わってきている。それはゆとり教育とは関係なく、ただ時代の流れに沿っただけではないかと和磨は思う。もし英語の能力向上がゆとり教育の結果だとしても、国語の能力低下もゆとり教育の結果であるとしか言いようがないため、まだまだ問題点があることは否めない。

世の中は上手いかないな——などと考えていると、二階から明が下りてきた。

「ん、ああ……」

相変わらずの寝癖をつけている彼は、明らかに社会人には見えな
い。滅茶苦茶な髪と気だるそうな表情と……極めつけにこのうめき
声。

「うめくな。俺まで力が抜ける」顔をしかめ、早くも力の抜けかか
っている声で和磨は言った。

「はあ、弟が朝からうるせえ……」

明は愚痴をこぼしながら、その長身を動かして冷蔵庫の前まで行
き、愛用の野菜ジュースをコップに注いでから和磨の方へと歩く。

「よっこらせつと……」

異常に体力を消費したかのような仕草で、明は和磨の隣に腰かけ
る。和磨に言わせればどうしようもないだめ人間だが、仮にも自分

より数年長く生きている人間である。和磨は聞いてみよと思った。
「なあ兄貴、始業式の前の日の話、覚えてるか？」

「ああ、記憶喪失の話か？」

覚えているとは思わなかった和磨は、心底驚いた表情になる。

「まさか覚えているとは――」

「和磨、あまり俺を落ち込ませないでくれ」

はあ、と大げさにため息をつき、明は野菜ジュースを飲む。和磨に若干似ている顔が、幸せそうに緩む。

「兄貴は最後、記憶喪失で不幸になるとは限らない、と言ったよな？」

「ああ、そう言ったな。それがどうかしたか？」

そんなことはなんでもない、というような表情のまま答えた明。和磨は率直に尋ねる。

「あれ、どういう意味だ？」

「はあ？ お前、日本語も理解できなくなったのかよ」

明はぼりぼりと頭を掻きながら、馬鹿じゃねえの、と言うように和磨の顔を覗き込む。

「いや、そうじゃなくて……」

「ま、言いたいことはわかるが、言葉通りの意味だ」明はテーブルの上で空っぽになったコップを回している。

「記憶喪失で不幸になるのは明白だろ」

当然ながら和磨はそう言った。それ以外には考えられない。

「それ、誰が言ったんだ？」

「今、俺が言ったぞ」

和磨は若干、馬鹿にする感じで言った。しかし明は、

「ほら、記憶喪失である本人の言葉じゃねえだろ」

「それは……確かにそうだけど……」

「和磨の言葉は世間一般の考え方によるものだろ。世間なんてすべてを平均化した集団が一体なんの意味をもつ？」

その言葉に、和磨は、押し黙った。

「その中にどんな考えを持つ人がいたとしても、大きな数で割ればちっけなものになっちまうだろ。そういうプラスでもマイナスでもない考えなんて、参考になるもんじゃねえよ」

言い返すことは、できない。確かにそうだとも思う。しかし和磨は、やはり納得できなかった。

そうこうしていると、明の携帯電話がメール受信を知らせる。

「兄貴にメールを送るとは、物好きな人もいるんだな」メール内容を確認する明に、和磨は皮肉を言う。

「ふふ、羨ましいか？」

「なにがだよ？」

すると、明はなにを考えているのかわからない、たまに見せる気味の悪い笑顔を浮かべた。

「デートのお誘いさ」

和磨はなんとも言えない、微妙な顔になった。

緑のある公園の横を、二人の女性が通り過ぎる。

片方の女性がある方向を指差すと、もう片方の女性がそちらを向き、感心したような表情で何事か話している。

この辺り一帯は、鹿児島市の市街地。

車や自転車、人、バスや電車など、様々な交通手段が入り混じっている場所である。しかし、それだけ交通があるということは、場所単位での汚染も進んでいるということ。実際、今まで綺麗な空気の中で生活していた人がそこに行くと、くしゃみが出たり、目がかゆくなったりするらしい。

というわけで、さすがに緑地はあるものの、全体に対しての割合は少ない。言ってしまうえば気休め状態である。また、人通りが多いということは商業用地として適しているということでもある。よって地価が異常に高騰しているのも、この辺り一帯が抱える問題であった。そのため、新しく建設される大きなショッピングモール、注目を集める店などは、その一帯ではなくて少し南に離れた場所にて

きるのが最近の傾向だ。いずれ土地の高い市街地は見放され、閑散な状態になってしまう——という予測をする人もいるほどである。

「あそこの店はね、地下に色々食べ物が売っていて、そこにあるたこ焼き屋さんが評判なのよ。たまにみんなで食べに行くの」

外見から落ち着きが感じられる女性——舞は、視界に入ってきた大きな建物を見ながら言う。

「へえ、今度私も、みんなと一緒に行きたいな」

心なしか、はしゃいでいるように見える葉月は、本当にそう思っているらしい。

「ええ、もちろん。今度みんなで行きましょう」

「えへへー、楽しみだな……」

舞と葉月が、二人でこの場所を歩いているのには理由があった。

それは、約一時間ほど前の話。休日をどう過ごすか迷っていた葉月の携帯電話が、着信を知らせた。ディスプレイには鎌田舞と表示されていた。

「もしもし、舞ちゃん？」

《戸田さん、今日暇かしら？》携帯電話のスピーカーから、落ち着いた声が響く。

話を聞いてみると、舞がまだ引越してきたばかりの葉月に、市街地を案内してくれると言う。葉月は舞の気遣いをありがたく思った。

「是非、お願いします！」

その後、二人は駅で待ち合わせをし、街の中を歩き始めた。葉月にとっては新しいことばかりで、とても楽しい時間を過ごすことができた。そのためか、いつの間にか正午になっていた。

「お昼にしましょうか」

「そうだね」笑顔を浮かべ、葉月は頷く。

「じゃあ、あそこの店にしましょう」

葉月と舞が目指すのは、ハンバーガーショップだ。二人はそれぞれに注文をし、二人がけの席に向かい合って腰を下ろした。そして

葉月は座ると同時に、「ふう、疲れた……」と、体内の疲労を吐き出すように言った。

「確かに、色々回ったわね」舞は答える。

「でも楽しかった。ありがとう、舞ちゃん」

「どういたしまして」

会話に一区切りつけると、舞は静かにハンバーガーを口へ運ぶ。

対する葉月は、ポテトを食べながらも、顔が緩みっぱなしだった。

「どうしたの？ そんなにニヤついてたら、少し気持ち悪いわよ？」

「いや……記憶をなくしても、普通に友達と付き合えるんだなっと思って」

「それは……まあそうね」

少し苦い表情を刻み、舞は答えた。彼女の表情に、葉月は口にするべき言葉ではなかったと、今さらのように気づく。

「ご、ごめん。今のなし、ね？」

「そう、わかったわ」舞は笑顔を浮かべてくれた。

（はあ、助かった）

まさか自分で墓穴を掘ってしまうとは思わなかった葉月。今後は気をつけなければと心の内で考えていると、舞が急に、

「ねえ、戸田さんは好きな人とか、気になる人とかいるの？」

話しかけてきた。その突然の問いかけに、葉月は思わず聞き返してしまう。

「え？」

そして驚いた葉月は、ポテトを落としそうになった。対する舞はからかうような笑みを浮かべて、

「実はこっちの方が本当の目的だったり」

と言うと葉月の額を指で小突いた。学校ではあまり見られない、舞の珍しい表情だった。

（舞ちゃんって、こんな顔もするんだ……）

それは、同じ年代の女性と同じことを感じ、同じことを考えている顔だった。

「クラスの中にいないの？　そういう人」

一応考えはするが、正直葉月はいないと思っている。しかしある出来事が頭の中に残っている。それは始業式の日、初めて会ったはずの和磨に、自分はなにかを感じたということ。

「いないよ。でも……」

「でも、なに？」

言い淀みながら葉月は、言っていないものだろうかと思ふ。しかし、誰かに言っておきたいとも思う。むしろその気持ちの方が強かったため、意を決して口を開く。

「あのね、私、始業式の日、橘君がなぜか気になったんだ」

「そうなの？」不思議そうに顔を傾ける舞。揺れる漆黒の長髪が煌いた。

「うん。彼を知っているような、変な感じだった」

「それって、記憶になにか関係あるんじゃない？」

舞の言葉は、葉月の心の中を見透かしたようなそれだった。だが、それはあまりに確率が低すぎる。それにまず、そうだとしたら和磨の方からなにか言ってくるはずだった。

「でも、橘君はそんな素振り見せないし。思い違いかも」

「確かに、そうだとしたら橘君がなにか反応を示すはずよね」

少し困ったような顔になる舞。その表情を見た葉月は、話題を変えようと、身乗り出して話す。

「それにしても、意外だったなあ」

「うん？　なにが？」　またもや不思議そうな表情をする舞。

「舞ちゃんがそういう話をふってきたこと」

「それは、私だって女だもの。当然でしょ？」

そのとき見た舞の笑顔は、やはり学校で見るものとは違っていた。

（一体なんなんだ、この状況は……）

和磨は言いようのない気まずさを感じていた。

（なぜ自分の恋人を、家族がくつろいでいる家に呼ぶんだ？）

明はデートに誘われたと言った後、内容はわからないがメールのやり取りをしていた。それがこの致命的な状況を呼び込んでしまった。

目の前には明の恋人と思われる女性が座っている。姿勢よく座っている彼女は、薄い化粧によって綺麗な顔立ちが際立っていた。しかし、沈黙が痛い。しかも目の前の人を呼んだ本人は、着替えに行ったきりなかなか姿を現さない。その雰囲気能耐え切れず、和磨は口を開いた。

「あの……俺、席はずしましうか？」

低く、丸いテーブルを挟んで向かい側にいる女性――はたなかりか 畠中里香は、部屋の中を見回していた瞳を、和磨に向ける。里香は長いまつ毛の下の目を見開き、肩にかからないくらいの髪を揺らして、

「え？　なんで？」

澄んだ声で言い、首を傾げた。その幼い仕草は彼女の年齢相応ではなかったが、不思議と違和感はなく、彼女の魅力を引き立たせた。（どうしてこんな綺麗な人が兄貴の彼女なんだ……）

「だって……気まずくないですか？」

「あはは」里香は笑う。そんなことなど全く気にしていなかったというように。「じゃあ、なにかお話ししましょうか？　えっと……」

そう言って彼女は言葉を継ぐ。薄い色の口紅に彩られた、里香の唇が言葉を発した。

「ああ、俺は和磨といいます」

「じゃあ和磨君」

「はい、なんでしょう？」まだ固い表情のまま、和磨は答える。

「初めてお兄さんの彼女を見たご感想は？」

悪戯っぽく笑いながら、里香は問うてきた。そんな彼女に和磨は言う、素直な感想を。

「なぜあなたのような綺麗な人が、自堕落な兄の彼女なのか理解できません」

「はは、ありがとう。でも、明が可哀想ね」

「言われて然るべき……という感じの兄ですので」

そう。明は和磨の前ではひどい生活をしている。確かに家というのは安心できる場所であり、家族の前では緊張など感じるはずもない。しかし、明はどうもだらけすぎていると、和磨は常々思っていた。

「ねえ、和磨君。明が友人といるとこ、見たことある？」

「それは、ありませんが……」

確かに見たことはない。だが、家での生活を見る限り、まともな交友関係があるとは思えないのも、和磨の本音だった。

「じゃあいい機会だから、教えてあげる」

和磨は思う。目の前で笑顔を見せている里香は、知っているのだろうか、自分の知らない明の姿を。そう考えながら彼女の言葉を待つと、里香の口から、少なくとも和磨にとっては意外な言葉が発せられた。

「明は、誠実な人よ」里香はなぜか柔らかい表情になり、本当に明を信頼している声で言った。

和磨は、少し疑った。

舞と葉月は、駅に来ていた。

ハンバーガーショップでの食事を終え、また少し街の中を回った後、解散しようということになった。舞と別れ、電車の中で一人、葉月は物思いにふける。

ここは自分にとって新しい場所。自分のなくしたものの断片——記憶の欠片は、この場所に存在するはずはない。そして、ここで一歩先に進もうと、決意した。

しかし、未だに漠然とした不安に襲われるときがある。

失った記憶なしに、新たな生活を送ることなどできないのではないのか。十数年という時間を過ごした思いをなくした自分では、友人たちと同じ場所には立てないのではないか。同じものを見ることはできないのではないか。

周りの人たちは、皆自分に普通に接してくれる。しかし、それが仮そのものだとしたら。心の中で距離を取っていたとしたら。自分は今、前に進むことなどできなくなる。人を信じられなくなってしまう……。

（うん、それは違う）

葉月は暗い感慨を振り払う。自分は進むと、決めたのではなかったか。もう決して振り返らないと、決心したのではなかったか。

（それに友達を疑うなんて、だめ）

思考に一区切りつけ、葉月は電車の中から外を眺める。穏やかに晴れた空。その下には幾つもの道がある。その道を見ていたとき、ふと、あの夢を思い出した。

あの、少年と少女の別離の瞬間。

毎回葉月は傍観者の立場で、あの夢を見ている。そのことから葉月は、恐らく自分が過去にあの場面を見ていたのだろうと考えている。だがあの、カズくんと言ウちゃんと呼ばれていた少年と少女は今葉月の持っている記憶の中にはない。

きつと、昔は友達だったのだろう。

葉月は、申し訳なさを感じる。そして同時に、心の中で謝る。もしかすると、このまま思い出さないままかもしれない。しかしそれさえも乗り越えて、自分は進まなければならない。

幸福なことに、今、自分の周りには友達がいる。葉月を友達として認識してくれる人たちがいる。頼りっぱなしになるのはいいことではないが、たまには支えてもらえるだろう。

葉月は一人、微笑する。

（うん、大丈夫っぽい）

葉月の気持ちに合わせてるように、電車は加速していく。空は、晴れていた。

「誠実？」和磨は声を上げる。

あの明が誠実。里香の言葉は和磨を驚かせた。

「ほんと、信じられないという顔をしてるね」

「はい……」

「明はね、決して他人をないがしろにしないの。そして、嘘をつかないわけじゃないけど、誠実なの」

「え？　嘘をつくってことは、不誠実じゃないですか」

「和磨君、それは違うわ」首を左右に振りつつ、里香は答える。

里香の言葉を、和磨は理解できなかった。なにが違うのか。嘘をつくことと不誠実であること。

「嘘の中には、善意からのものもあるでしょ？」

「あ……」

「そう。誠実であるということは、相手に対して真心を持つということ。同じように、善意からの嘘は相手を思いやるからこそその行い」

「まさか兄がそんな人だったとは……」

「思ってたなかった？」里香は笑う。

和磨は、明を誤解していたことを自覚した。自分の前では常にだらけている明。しかし彼はこんなにも人を、人との繋がりを大事にしていたのだ。

「でも、どうしてそこまで家での態度と差があるのでしょうか？」

和磨は心に浮かんだ疑問をぶつける。

「安心できる上に、ずっと張り詰めてたら疲れるからでしょうね」

穏やかに答えた里香の言葉に、和磨は納得する。そう、人は万能ではない。ずっとそのような状態を維持することはきつと難しい。

どこか気を抜くことができる場所が必要なのだ。それはきつと、自分が気を遣わなくてもいい人だけが周りにいるという状況、すなわち家だ。

そしてそこに、ふと疑問がわく。明にとって目の前の人は、どの程度の人間なのだろうか。

「畠中さんだけの前ではどうなんです？　うちの兄は」

「それって、周りにいる知ってる人が、私だけの状況ってこと？」

「はい」和磨は頷く。

「外にいるとき、見た目は普通よ。でも、会話に気を遣ってる様子はないし。私が、彼にとつてそれくらい存在になつたってこともね……って、これはさすがに自意識過剰かな」

里香は少しだけ和磨から視線をずらして笑う。

「とにかく、明にとつて家は心休まる場所だから、ね」

「はい、兄の信頼に答えるよう、努力します」

「それでよし、少年」

言いながら和磨は思った。今度から自分は、明に対して今までとは違う接し方ができるだろう。ただ兄としてではなく、一人の尊敬するに値する人間として。

すると、里香が思いついたかのように口を開く。

「兄弟って普通、似るものだよね」

「そうですね……俺は家であんなに自堕落ではありません」

「はは、そうじゃなくて、和磨君にもそういう、人を大事にする傾向があるんじゃない？」

（確かにそうだ）

和磨は、自分と関わってくれた人たちに、幸福であつて欲しいと思う。そのためなら、ある程度の自己犠牲はしてもいいと思うほどに。

「多分、あると思います」

「うん。それなら、その考え方は大事にすればいいと思うよ。もしかすると、色々な矛盾に直面することになるかもしれないけど、ね」

「はあ……はい」

（畠中さんは難しいこと言つな……）

里香の発言について、和磨が考えようとしたとき、

「おーい、準備できたぞ——って、不出来な弟となに話してんの？」
明の声が聞こえた。

その声を聞いた和磨は静かにもらず。「失礼なやつ」

「ただの世間話よ。じゃ、和磨君またね」

明の問いかけに答えた里香は、その肩よりも短い髪を揺らし、和

磨に声をかけながら立ち上がった。本当の明の姿を覚えてくれた彼女は手を振り、そのまま明と共に玄関へ消えていく。

部屋には、里香の香水の香りが薄く残っていた。

辺りは暗い。

そこにある木々は光によりライトアップされ、物静かな雰囲気を放っている。

そこは公園。

その場所に、一人の青年が立っている。その青年が、一人、呟いた。

「お前は、約束破るような奴じゃないだろ……？」

がっしりした体の青年、進一の表情は、明らかに楽しいものではない。暗い、というより、どこか悲しげで、寂しげな表情をしている。

「なんなんだよ……」

進一は一人、友人の名を言う。

「稔……」

その声に答える者は、いなかった。

この日、空は晴れていた。

進一がいる場所と同じ公園内、その長身に似合わずブランコに座って静かに揺られている九天の姿がある。彼はその長いコートの裾が汚れるのにも構わず、小さな金属音を立てながらブランコを揺らしている。

「ある者はこの空のように、晴れやかな気持ちだった。ある者はその日の空とは逆に、悲しい感情を抱いた」

次の瞬間、九天は大きくブランコを揺らした。

「平穏な日常の崩壊は、突然やってくる。その当事者の悲哀と、自分の非力を悩む者の非日常は――」

言いながら九天は、勢いをつけたブランコから飛び降りる。そし

てその着地のエネルギーを踏み込みの力に変え、一般的な跳躍の高さを超えるそれをみせたかと思うと、そのまま公園内の街路灯の上に降り立った。

「——そこまで迫っていた」

その言葉を最後に、九天はもう一度街路灯の上で跳躍した。先ほどのものとは比べ物にならないほど高く跳び上がった彼は、一秒も経たないうちに、夜の闇と区別がつかなくなった。

第四章

日付は四月二十三日、月曜日。

いつものように始まった日常の中、葉月は学校へ向かって歩いてきた。視界に入ってくる風景は、最近やつと見慣れてきたものだ。新しい環境とはいっても、しばらくそこで暮らせば日常となる。人間の適応能力によるものだが、果たしてそれが一般的にいいことなのかはわからない。

（見慣れてくると、それが普通になっちゃうもんね……）

今日も同じようにここにある、幸せな日常。ただそこに日常があるということ、人は軽視しているように感じる。それはとても悲しいことであり、それを失ったとき、初めてその重さに気づく。

そう。葉月は、日常を失った。

しかしそれは、とても大切なものだったと感ずること、それ自体ができなくなる失い方だった。かつて自分が幸せの中にあつたということ——そのことさえも、葉月は実感することができなくなった。きっと大切だったであろう、他の誰でもない自分の日常を。

正直言つて、とても辛かった。自分にはなにもないということが。気持ちの整理をつけるのに、多くの時間を必要とした。そして葉月は決心した。新しい場所で、もう一度出発しようと、そこで日常を感じようと。

そう、今となつては自分は何にも持たない人間ではない。記憶を失つてからの記憶もあり、自分の周りにはしっかりと日常がある。

そしてなにより、友人がいる。

たとえ記憶が戻らなくても、自分は戸田葉月であることができる……最近はその思っていた。そして願わくば、この日常が続けたいとも。

気がつくといきは騒がしくなっていた。考えごとをしているうちに、教室に着いたのだ。自分の席に向かう途中、稔に挨拶をする。

「上原君、おはよう」

「あ、おはよう」

葉月の方を向いて挨拶を返した稔は、笑いながらもどこか暗い、自嘲と呼べるほどの表情をしていた。

それは葉月が初めて見る稔の姿だった。

自分の席に着きながら葉月は疑問に思う。葉月の知る限り、稔はいつも明るく、あんな複雑な顔をするような人ではない。きっとなにかあったんだろうと、自然に想像してしまう。

とはいっても、葉月には全く心当たりがなかった。先週末も、いつも通りの身の振り方だったはずだ。ここは同じ男性であり、隣の席に座っている和磨に聞いてみるのが早いだろうと、葉月は質問の口を開いた。

「ねえ、橘君」

「ん、なに？」

考えごとをしていた和磨は、隣に葉月が座っているのに気づいていなかった。相変わらず綺麗に整えられた葉月の髪は、肩にかかるくらいの長さで揺れていた。

「上原君さ、なにかあったのかな？」

と言って、首を少し傾げる。愛らしくも見える仕草をしながらも、葉月の目は怯えるような色をしていた。

「ああ、それ、俺も思ってた」

しかし、彼女はなにに怯えているというのか。記憶を失くしている彼女は、自分にはわからないなにかを恐れているのだろうか。とはいっても、稔の表情を見て、平穏な日々の崩壊に怯えている和磨に、言えることではなかった。

「橘君も知らないの？ 知ってると思ったのに」

「よくわからないんだ。でも、そう言えば今日——」不審なことを思い返した和磨は言った。

「うん？」

「今日川上と一緒に学校にきたんだけど……あいつ、稔が見えても声をかけなかったんだ」

「いつもは、声をかけてるの？」

「そうなんだけど、疑問に思ってた聞いてみたら、『いいんだ』しか言わないんだよ」

そう、今朝の進一の態度はおかしかった。言った通り、いつもなら声をかける稔を、意図的に遠ざけているというか、避けているというか。

「それって、なにかあったってことだよな」

「確かに。今日一日待って、状況がよくならなかったら聞いてみる」

「そっか。私からも、お願いします」

「ん、承りました……っ」と言いながら和磨は体を伸ばす。

今朝も問題なく始まり、いつも通りなのが普通だと思っただけ、なに考えずに過ごしていた時間。いや、それが普通だとすら思っていなかった。ただその状況を甘受していただけ。しかしそこには、確実に変化が表れていた。なにかよくないことになりそうな予感を感じた和磨は、葉月に話しかける口を開いていた。

「それにしても……」

「うん？ なに？」 またもや葉月は首を傾げる。

「よく上原が変わってわかったもんだよな」

「それは、いつもと様子が違うから……」

その言葉からは、葉月は葉月なりに、稔のことをよく見ているとということがわかる。そう思いながら和磨は聞いてみる。

「やっぱり、心配？」

「うん。時間は笑ってても泣いてても同じように過ぎるから……やっぱり楽しい方がいいよ」

葉月は視線を和磨から逸らし、人を大事にする、どこか寂しげで、儂げな顔をした。

その顔に和磨は正直、戸惑った。こんな葉月の顔は見たことがなかったからだ。葉月も色々と、思うところがあるのかもしれない。

一日が、始まった。

和磨は授業を受けている間に、稔や進一の様子を伺ってみたが、やはり彼らにはいつものような活気が欠けていた。これはさすがにあまり好ましい状況ではない。できることなら今までと同じように、気にすることなどないというような関係に戻って欲しい。しかし――。

（この俺に、なにができるのだろうか）

和磨は思う。自分にはなにができるのかと。確かに和磨は他人を大事にしているし、相手への思いやりなら、誰にも負けないと自負もしていた。

けれど、それが問題の解決に繋がるのだろうか。

自分は今まで、いい関係がずっと続くと感じていたような人間だ。自分は精一杯やっている、相手の気持ちを知っているはずだと信じて。しかし、それは思い込みでしかなかったのかもしれない。

（甘かった、理解が足りなかったんだ。いや、理解などと言っている時点で俺はだめだ。人の心を、完全に理解することなんてできないのだから）

ただいつも近くで時間を共有しているというだけで、相手の全てを理解しているものだとは勘違いしていた。先ほどもそうだ。見たこともない葉月の表情に、戸惑った。和磨は、いったい自分は今までなにをしていたのかわからなくなってきた。

『――』

そこに、昼休みを告げるチャイムが鳴った。内省の時間を終わりにした和磨は、ふと、誰かが近づいてくるのに気がついた。

「橘君、ちょっといいかしら？」

相変わらず真っ直ぐに伸びた背筋に、背中まである長い髪。落ちて着いた顔に無表情を浮かべ、近づいてきたのは舞だった。

「ん？ いいけど」

なんの用があるのか和磨にはわからなかったが、舞は近くの椅子

に腰を下ろす。

そして、目を合わせてきた。

なにかしら心の中を見定めるような、物事の本質を捉えている瞳。彼女特有のその瞳で、和磨のそれを覗き込んでくる。

「な、なんだよ？」

その真っ直ぐな眼差しに耐えられなくなり、和磨は沈黙を破る言葉を発する。すると舞は少しだけ、同情するような表情になった。そして、口を開く。

「し……いえ、川上君と、上原君のこと？」

「え……？」和磨は呆けた返事を返す。

「橘君、思い詰めてるでしょう？」

「な、なんで……」心の内を完璧に読まれ、和磨はうろたえる。

「橘君って、感情を顔に出さないのが上手よね」

そう言った舞は、今の自分がなにを考えているのかわかっているのかと、和磨は驚く。

「でも、今困っているでしょ」

やはり舞は、和磨が今なにを考えているのかわかっているようだった。そのことを話すために、和磨のところに来たのだろうか。

「まあ、確かに鎌田の言う通り」

「で、どうしようと思っているの？」頬杖をついて、舞は尋ねてくる。

「今日の放課後にでも、とりあえず川上に話を聞こうと思う」

「そう。ねえ橘君……」

「ん？」心の奥で別なことを考えながら、和磨は答えた。

自分にはもしかしたらなにもできないのかもしれない。しかしやれるだけのことはしておきたいと。それが自分の生き方であり、信条だと思っているから、と。

「困ったことになったら、私にも頼るのよ？」

「え、いいのか？」

心底驚いたかのような和磨の声音に、舞は今までの複雑な表情を

一変させ、

「いいに決まってるでしょう」本当にそれが心からの言葉であるように、笑顔で言った。

和磨は、また戸惑った。

同じ日、学校からの帰り道に、和磨は進一を誘っていた。

「なんだよ、話って」

進一と並んで歩く和磨。進一はいつものように歩いているが、やはりその顔に活気はない。

「ああ、そのことなんだがな……」

自分にもかできることがあるはずだと自らに言い聞かせつつ、進一に話しかける。前のような明るい彼に戻って欲しくて。

「川上、上原となにかあったのか？」意を決して聞いてみた。進一の反応によつては、自分はなにもできることがなくなってしまうことを思いながら。

しかし和磨の言葉に、進一は苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

（やっぱり、俺にはなにも……）

和磨は彼の表情を見て諦めかけたが、そんな内心の思いを知ってか知らずか、進一は説明する口を開いた。

「あのな、稔が約束を破ったんだ」

「約束を……？」

和磨は自分の質問に答えてくれたことに安堵を覚えたが、進一の言葉にそれもすぐ消えた。

「嘘だろ？ あいつはそんな人間じゃない」

「和磨、俺の言うことを信じられないのか？」

進一は、お前は疑いたくない、とでも言うかのような視線を和磨に向けてきた。ここで彼を追い詰めるのはまずいと感じた和磨は、慌てて言った。

「いや、そうじゃないんだ。悪かった」

すると進一は、強面の顔に刻んだ苦渋の色を和らげた。そのことに安心しつつ、和磨は進一の言葉を聞く。

「そうか。俺な、あいつと待ち合わせしてたんだ。稔の誕生日が近かったから、なにかお祝いをしようってな」

進一は嘘をつくような人間ではない。彼がそう言うのなら、そうなのだろうと和磨は思う。

「けど、いつまで待っても稔は来なかった。別に来られないんならいいんだよ、予定なんて、いつなにが起こるかわからねえんだからよ。だが稔は……」

「上原は、どうしたんだ？」和磨は息を吞みつつ、尋ねる。

「来れないって連絡すら、なかったんだ」悔しそうな、悲しそうな表情をして、進一は告げた。

「そう、か……」

和磨は、彼があまり細かいことを気にするような人間ではないということを知っている。ある程度のことなら、笑って許してくれる人だ、とも。しかしその進一がここまで言うのなら、相当ショックだったのだろう。

しかしおかしい。稔は稔で、友人を軽く見るような人間ではない。やはり、なにか事情があったとしか考えられない。しかし、

「俺は、稔を信じられなくなっちゃった」進一は結論を出そうとしていた。

「待てよ、稔だってなにか事情が——」

「ショックだったんだよ……！」

和磨の言葉を遮るように、進一は強い口調で言った。

「俺はあいつにとって、所詮その程度の存在だったんだよ」

「おい……」進一の強い語調に押されて、和磨はまともに言い返せない。

「じゃあな、和磨」

言いながら進一は立ち去ってしまった。春の穏やかな日差しの中、風を切って歩くその背中からは、どうしようもない悲しみが感じら

れた。

「川上……」

離れてしまった進一に、和磨の声はもう届かない。このままでは、みんなばらばらになる。

（俺は、無力だ……）

どうやって解消すればいいかわからない自分に対しての激しい苛立ちを感じながら、和磨は一人、自宅への道を歩いていった。

辺りは暗くなっていた。

四月二十三日、午後九時。戸田家のある部屋、鎌田舞のアドレスが表示された携帯電話を片手に持ち、通話ボタンを押す葉月の姿がある。彼女が舞に電話したのは、今日の学校での出来事、つまり稔や進一のことについて話すためだった。

（電話、出てくれるかな……）

不安に思う葉月。午後九時に電話するのは少し非常識かもしれないと、今さらのように気づき、明日話せばよかったのかもしれないという思いが彼女の頭の中によぎったが、今日の内に話しておきたいという思いのほうが強かった。そうしていると、相手が電話に出る、独特の音がスピーカーから響いた。

《もしもし？》くぐもった舞の声が聞こえた。

「あ、舞ちゃん。遅くにごめんね」

《別にいいのよ。暇していたし》

恐らくはこの言葉も、舞が気をきかせてくれたものなのだろうと葉月は思う。いつも舞は、必ず余裕を持って行動する。物理的にも精神的にも。その余裕からくる、気遣いなのかもしれない。

そう思いながら、葉月は本題に入る。「あのね、上原君と川上君のことなんだけど……」

《うん、なに？》

「今日の二人、変だったよね……」

《ああ、そのことね》まるで葉月がこの話題を話すことを心得てい

たかのように、舞は応答した。

葉月は稔の異変に気づいて和磨と話した後、進一の方も授業中などに様子を伺ってみたが、やはり稔と同じように、いつもの元気がなかった。

「やっぱり、舞ちゃんも気づいてたんだ」

《ええ、一応ね》

舞もそのことに気づいていたことに安堵する葉月。しかし自分も含め、気づいただけではなにも解決することはできない。葉月はなにか、行動を起こす必要があると感じていた。

「ねえ、私、なにかできることないかな……？」

《あら、戸田さんも優しいのね》少し茶化したかのような声音で、舞は答えた。

葉月は気になって聞き返す。「も？」

舞がそう言ったからには、誰か他にもこの問題を解決しようとする人がいるということだろう。思いつく人物といえは……。

和磨だ。

和磨は自分なりに動いてみると言っていた。やはり、放っておけないのだろう。

「橘君……か」

《そういうこと。今日橘君は、し……いえ、川上君に話を聞いているはずよ》

「そっか。私、なにかできるかな？」自分では思いつかず、葉月は尋ねる。

（こういうときに色んな人から色々言われると、かえって鬱陶しくなってしまうものよ。だからここは、がんばっている橘君を信じればいいと思うの）

確かに、舞の言う通りかもしれないと葉月は思う。自分一人で考えていたら、そんなことは思いつかなかったかもしれない。

「そうだね……。わかった、橘君を応援するよ」

葉月は答え、思う。そうと決まった以上、自分がしゃばって行

動を起こすわけにはいかない。ここは和磨を信じ、問題の解決を願うしかない。そう思っていると、再び携帯電話が音を吐いた。

《ねえ、戸田さん》

「え、なに？」

葉月は少し思考が遊離していたが、舞の言葉に現実引き戻される。頭の中を整理しつつ、舞の言葉を待つ。

《あなた、いい人ね》

「え？ いきなりそんなこと言われても照れるよー」少々驚きつつ、葉月は答えた。

《もし橘君が苦しそうだったら、話を聞いてあげてね》

「え？」

「彼だって人間。万能ではないわ」

「そっか、わかったよ」

その後、葉月は少し世間話をしてから、礼を言って電話を切った。今後の方針は決まった。とりあえず、皆とはいつも通りに接しようと思に決める。そして、彼ら男子三人の様子をしつかり窺うようにしよう、と。その上で和磨に限り、なにか苦しそうな様子だったら声をかけて、一緒に悩むくらいのことではできるだけだろう。

「よしっ」葉月は静かに呟いて、夜の闇を映している窓へ視線を向けた。

日が落ちて久しい空には、星が輝いていた。

四月二十四日、火曜日。

朝の爽やかな空気が、辺りを包んでいる。

その中を歩く一人の青年——和磨は、いつもとは違う一人の登校の時間にたいして、こんなにも寂しいものだったかと思いを馳せながら、静かな風に髪をなびかせていた。

この日は登校中に進一に会わなかった。いや、会えなかったというのが正しいかもしれない。昨日進一とあんな別れ方をしたため、和磨の気持ちは重い。進一も同じだろう。進一も、そんな状態で一

緒に登校しようとは思えないだろう。

しかし、ここで諦めるわけにはいかない。

進一の話聞く限り、稔になにか理由があることがわかった。その理由を稔から聞いて、進一にわかってもらえればきっと元に戻れると、和磨は盲目的に信じていた。

そして、放課後。

稔には、話があるから教室に残っていてくれと言ってある。

和磨は、教室に人がいなくなるまで、図書室で待っていることにした。そしてそこに、見知った姿を見つける。片手に本を持ち、なにか本を探しているのは、葉月だ。

気になっ和磨は葉月の持っている本をよく見ると、それは恋愛小説の類だった。声をかけようとも思ったが、あまり個人のプライバシーに立ち入るのはよくないし、そこまで親しい間柄でもない。そう思い、やめた。

しかし、ふと和磨は自分の思考に違和感を覚えた。

（そこまで親しい間柄でもない……？）

なぜ自分はそう思ったのか。そもそも、葉月とは普通の友人だ。そんな彼女に対して、親しい間柄がどうという考え方はおかしい。

今の自分は、葉月と距離を取ろうとしているのか。いや、そんなはずはない、まずそんなことをする理由がない。

しかし、直前の思考がそれを物語っていた。だとしたら、なぜ自分は葉月と距離を取ろうとしているのだろうか。自分と関わる全ての人の味方であるうとする自分が――。

□――□

そのとき、チャイムが鳴った。それは全ての授業の終わりを告げるチャイム。今日和磨たちのクラスは、他のクラスよりも早く授業が終わっていたため、ある程度の時間が経ったことになる。

（まずい、そろそろ教室に行かないと）

葉月のことに関する思考をやめ、しかし後からしっかり考えるために、携帯のメモ帳に「葉」と打ち込んだ後、和磨は教室に向かう

足を動かした。

教室に向かう足を進めながら、和磨は思う。稔はきっと理由を話してくれる。そうすればまた元の生活に戻る、と。期待と若干の緊張を胸に、和磨は稔の姿がある教室に入った。

「上原、待っていてくれてありがとう」

「あ、橘君」稔は和磨に気づいて声を上げた。

日が傾いている時間、教室には夕日が差し込み、和磨と稔の顔を紅く染めている。

「それでなに？ 話って」

「率直に言っけど、川上とのことだ」

「あ、その話か……」稔はあからさまに表情を曇らす。

答えたその目には、なにかに対する否定の色が強く宿っていた。

「川上は、お前が約束を破ったと言っていた」

「……」稔は答えない。

「シヨックだった、とも言っていた。上原、なにか理由があるんだろ？」

「……」

和磨が尋ねても、稔はずっと無言。なぜ、どうしても言ってくれないのかわからない。

「なあ上原、俺は川上とお前がずっとこのままじゃ嫌なんだ。答えてくれ」

「……」それでも答えない稔。

「どうして、なにも言ってくれないんだよ」

「それは、言えないよ……」

やっと口を開いてくれたことに、無視されているのではないと安堵した和磨。だが稔は今にも壊れそうな表情をしている。明らかに、今稔を追い詰めているのは自分だ。

しかし、ここで諦めるわけにはいかない。

「なんで、言えないんだ？」

「ごめん……」

そう言つて稔は口を閉ざし、下を向いた。その姿に、最初に見せた瞳にあつた強い否定の色は、和磨に対して理由を説明するという稔の行為自体を否定するものだったのだろうと気づく。

ここまできて、自分はなにもできないのか。今までの日々を、取り戻すことはできないのか。

（なんてザマなんだよ……）

それから、二人ともなにも言わない数分間が過ぎる。なにも言わない稔と、自分の無力を思い知らされる和磨。そこには奇妙な雰囲気があつた。

しかし、その沈黙も破られる。教室に入ってきたこの事柄の当事者の一人、進一によつて。

「……！」声にならない声を上げる進一。

一瞬驚きの表情が見えたが、すぐに彼は平静さを取り戻した。忘れ物でも取りにきたのだろうか、進一は、自分の机の中から荷物を取つて鞆に入れ、こちらを向いて立ち止まっていた。

「川上……」そんな彼に、和磨はまともな声をかけることができない。

そう、和磨は稔から話を聞くことはできなかった。もうここは、本人たちに任せるしかない。

それを察したのか、進一はこちらに歩み寄り、その顔に無表情を浮かべて静かに告げた。

「上原」

稔は驚いて顔を上げ、それからすぐに悲しそうな表情になる。進一の言動に和磨も驚いていた。なぜなら彼は今、普段なら避けるはずのよそよそしい呼び方、名字で稔を呼んだのだ。

「なんでなにも連絡をくれなかった？」

「それは……」言つたつきり、稔は黙つてしまう。

稔のことだ、きつと仕方のない理由に違いないのだが、なぜかそれを話そうとはしない。

「そうか、なにも言わないのか」進一の目が細められる。彼が浮か

べた表情は、和磨が初めて見る、進一の憎悪のそれだった。

「もうお前とは、付き合えないな」

進一は最悪の結論を出そうとしていた。和磨はなにか言わなければと焦るが、思いだけが空回りし、まともな思考ができない。

「待てよ、上原だってなにか事情があるんだ」

苦し紛れに和磨は口を開いたが、進一は目を細めたまま、和磨の方を向いて言う。

「和磨、お前はどっちの味方なんだ？」

「え……？」すぐに反応することができない。

「裏切られた俺と、なにも言わない上原。どっちの味方なのかと聞いているんだ」

「それ、は……」

どちらの味方か。

そんなものは決まっている。和磨は二人の、両方の味方だ。しかし今そんなことを言って、この状況がよくなるのだろうか。進一はどちらの味方かと聞いている。両方だと答えれば、きっと状況は悪くなる。それでも、和磨はそれ以外の答えを知らなかった。

「両方、だ……」

和磨の言葉を聞いた進一の顔に、失望の色が浮かぶ。

「そうかよ。お前はなにも言わないようなやつの味方もするのかよ」

「お前、そんな言い方はないだろ……」他に反論の仕方を思いつかない。

「和磨、俺はもう、なにを根拠にお前を信じればいいのかわからなくなった……」

「な、おい」

進一は、もう怒ってもいない、ただ心が通じなくなったことを悲しむ目を向けた。そして、こちらに背を向けて、

「じゃあな、上原、それに……」

「おい、待てよ！」必死に引き止めようとする和磨。

進一は一度だけ振り返り、

「橘」

「な……」

一言だけ告げると、進一は教室の出口へと消えていった。彼の去り際の言葉に、和磨は声を発することもできない。

「ごめん、橘君……」

そんな和磨を置いて、稔も教室から出て行くのが見えた。

和磨は、床に膝をついた。

昔から続いていた繋がり。ずっと切れないと思っていたそれは、その実細い糸だった。わずかな衝撃にも耐えられず、小さな音を立てて切れてしまった。

結局自分は、なにもできなかった。

ただただ、自分は自惚れていただけだった。相手のことを理解していると思い込み、今ある現実という名の、その実幻想でしかなかったそれに浸かっていただけだった。

自分は、無力だ。

「ふ、はは……」

自然に、自嘲の笑みが和磨の顔に刻まれる。

「はは、は……」

和磨はその後しばらく、泣きながら笑っていた。

（どうしよう）

葉月は悩んでいた。

（私はなにをすればいいんだろう）

話は一時間ほど前に遡る。図書室で本を借りた後、机の中にシャープンを置き忘れたことに気がついた葉月は、教室に取りに帰り、そして、見てしまった。

和磨と進一と稔が、ばらばらになってしまうところを。和磨が壊れたように、泣きながら笑っていたところを。

葉月は、見ているだけでなにもできなかった。途中、話に割って入ろうとしたが、余計にややこしくなるだけだと、なにもしなか

った。そして和磨は、自嘲の笑みを刻み――。

葉月には、かけてあげられる言葉がなかった。彼を安心させるだけの、力がないと思った。だから、そこから立ち去った。いや、それだけではない。見ていられなかったのだ。あんなにも他人を大事にし、思いやっていた和磨が崩れるのを。自分を救ってくれた和磨を、自分では救うことができないのだと思った。

（すごく苦しくて、悔しかった）

自分にはなにもできない以上、誰かに助けを求めるしかない。葉月は舞に相談しようと決める。そう決めた葉月は、舞の家の近くの公園に行くことにした。歩きながら考えていたので、駅はすぐ近くだ。

切符を買い、電車に乗って、舞の家の近くの公園へと向かう。舞の家には前に一度行ったことがあり、そのとき公園で食事をしたので、一応場所はわかる。

葉月は電車に揺られながら、舞に、話があるから今から公園に行く、という内容のメールを送り、考える。あの現場を見たとき、なぜ自分はあるのに苦しくて、悔しかったのだろうかと。

初めて学校に来た日、和磨は自分を気遣ってくれた。そのことに本当に感謝し、救われたのは事実だ。

せっかく出会えた人だから、できることなら笑い合って日々を過ごしていたい。それは進一や稔も同じだ。けれども、一部始終を見ていた中で一番心が痛かったのは、和磨が泣きながら笑っていたのを見てしまったとき――。

「わっ」

突然大きく揺れた電車に、葉月は小さく悲鳴を上げた。

気がつくと、窓から見える風景は見たことがあるものに変わっていた。葉月は考えことをやめ、電車が止まるのを待った。

（舞ちゃん、待っていてくれるかな）

電車を降り、駅からすぐ近くの公園へと向かう。すると公園のベンチには一人の女性が座っていた。ベンチに座り、春の風に長い髪

を揺らしているのは、舞だ。

「ありがとう、来てくれてたんだ」

感謝の思いを言葉に変えた葉月に、舞は笑顔に向けた。

「ええ、どういたしまして。ここ、座りなさいな」舞は自分の隣の空いている場所を叩く。

「うん。それでね、話なんだけど……」

早速本題に入ろうとしたとき、ふと、葉月は思う。

ここで舞に話してしまうのは簡単だ。しかし、話してしまえば舞はこのことに巻き込まれ、葉月と共に悩まなければならなくなる。果たして、それは許されることなのだろうか。すると舞は、

「ほら、私ならどんな話でも大丈夫だから、話してみて？」葉月の心を見透かしたかのように言った。

「結構、困った話だよ？」

「私があなたと一緒に悩むのは嫌だと感じてるとでも、思ってるの？」

「え……。ううん、ありがとう。あのね——」

あくまでも優しくしてくれる舞に、葉月は全てを話した。

和磨たちがばらばらになったこと。自分にはなにもできなかったこと。それが悔しかったこと……。

「そう……確かに困ったことになったわね」わずかに表情を曇らせて、舞は相槌をうつた。

「うん、そうなんだ……」対する葉月も顔をうつむける。自分にはなにもできなかったことが、恥ずかしかった。

「それにしても戸田さん、あなた……馬鹿ね」

「え？ 馬鹿？」

いきなり馬鹿と言われて、葉月は戸惑った。自分の行動の、どこがいけなかったのだろうか。

「そう馬鹿。あなたはなにもできないなんて、そんなことないのに」

「え？ でも実際、私は橘君にかけてあげられる言葉がなかったんだよ？」舞の真意がわからず、葉月は聞き返す。

そう言う葉月に、舞は微笑すら浮かべて告げた。

「そういうときはね、例えできないことがないと思っても、そこにいるだけで充分なのよ」

「いるだけで……？」

そんなこと、思いつきもしなかった。しかし、本当にそうなのだろうかと葉月は思う。

「そういうもののなの？」

「ええ、そういうもの」舞はくすりと笑い声をもらし、答えた。

彼女は何事も本質を捉えているような人だ。その彼女が言うのだから、そうなのだろう。しかし、それももう終わったこと。葉月は舞と共に、これからの対策を考えなければならぬ。

「でも、これからどうしようか？」

「そうね……。やっぱりここは、橘君にがんばってもらわないと」

「うん。でも橘君、さっき話したような状態だよ？」和磨の表情を思い浮かべながら、葉月は言った。

「なら、あなたが元気にしてあげなさいよ」

「え、私？ 無理だよそんなの……。さっきも言ったでしょ？ 言葉がなかったって」葉月は首を大きく振って否定する。

そもそも自分に、そんな大きな役割を果たせるはずはない。この問題をきっかけに、葉月の中で和磨の存在がよくわからない、もやもやとしたものになっているというのに。

「そう、なら私がその役、引き受けましょうか」

「うん、お願い。舞ちゃんなら大丈夫な気がするよ」

舞に頼んだ葉月は思う。これで問題はきつと解決に向かってくれる。彼女が動くのなら間違いはないだろうと。そう考えていると突然、舞は暗い表情を一変させて口を開いた。

「それにしても戸田さん」

「え、なに？」

「あなた彼のこと……ま、いいわ」

「ちよつと舞ちゃん、なにを言おうとしたの？」

「独り言よ、独り言」

言いながら舞は、あの、学校では見せない笑顔で言う。葉月には舞がなにを考えているのか、全くわからなかった。そして「もう」と口を尖らせて視線を外す。

それから葉月は話を聞いてくれたことにお礼を言い、帰宅の道についた。

これできつと問題は解決する。しばらくすれば、また前のように笑い合える。葉月はすっかりとした気持ちで電車に乗った。

葉月のシャーペンは、机の中に入ったままだった。

電車に乗る葉月の向かい側、背を向けて立っている男性の姿がある。

目立つ長身、逆立てた白銀の髪、膝よりも下まである長いコート。それらの特徴を持つ彼の名は、

「そう、私は九天。この物語の語り手」

誰に語りかけるわけでもなく呟く彼に、不信感を持つ乗客はいない。まるで彼の声が聞こえていないかのよう。そんな周りの乗客には目もくれず、九天は一人、呟きを続ける。

「過去に大切なものを失った彼女は、皮肉にも、彼が大切なものを失うのを止められなかった」

彼は揺れる電車の中で吊革につかまることもせず、ただ流れていく窓の外の風景を見ている。泡沫の夢のように消え行く街の光に、彼の顔は彩られ、複雑な陰影を映し出す。

「彼女は苦しみ、行動した。彼は絶望し、涙した」

そう言うとき九天は窓から視線を外す。揺れている電車の中、彼の立ち姿は全く揺らぐことはなかった。

「そして五人の関係は、複雑なものとなっていく」

言いながら九天は、電車の出入り口に向かって歩き出す。今は閉じられている、外との隔たりへと。

「全てを過去の出来事にしながら、時は進む」

その言葉を最後に、九天は電車のドアにぶつかつた。いや、彼の存在が電車のそれと混ざり、そして、九天は閉じられたドアをすり抜けた。

相変わらず、彼の様子を不審に思う者はいなかった。

第五章

「お前は、なんのために生きているのだ？」

うん……？

「お前の生きる意味を問うているのだ」

俺の生きる意味は……人の役に立つことだ。

「それは本当に心からの言葉か？」

ああ、そうだ。

「お前は、自分の中に生きる意味を見出せないのか？」

なんだと？

「周りに人間がいないと生きる価値を持てないのか？」

そんなことは関係ない！

「人の役に立つなど、そんな曖昧なものを生きる目的とするのか」

そうだ。なにが悪い。

「その結果が、あの出来事だとしてもか？」

な……。

「お前の勝手な考えが、あのような結果をもたらした」

うるさい！

「所詮お前などその程度の存在なのだ」

う……。

「お前は自覚したのだろうか？」

なにを……だ？

「お前は、なにもできない」

……っ！

同じ日、時刻は午後十時。すっかり日は暮れており、辺りは暗く、満天の星が輝いている。

幾つかの家が並ぶ場所で、いつものように窓から光が漏れている家の中、和磨は自分の部屋にいた。

嫌な夢を見た。

和磨はベッドに横になり、窓から見える星を眺める。小学生の頃は、理科の学習の一環として星を観察したこともあったが、今はすっかり興味を失ってしまい、ただ綺麗だなとしか思えないものになってしまっている。

和磨の部屋の中には、机、ベッド、タンスがあり、机には写真も飾ってあった。中学生の頃の学級写真、家族で行った旅行のときのもの。中には少し古い、少年と少女が手を繋いで写っているものもあった。

そんな写真を見ても、和磨は感慨に浸る気が起こらなかった。

両親には明日から数日、学校を休むと言ってある。よほどひどい顔をしていたのか、両親はなにも言わず、ただ心配そうな表情で了承してくれた。

今は、なにもする気がしない。

「はっ、笑っちゃまうよな」

自分は、日々変化しているものに気づいていなかった。変わらないもの、永遠なんてものは存在しないということを知らなかった。皆の味方でいることが、正しい在り方だと思っていた。

しかしその実、それは苦しみを伴うものだった。相対する人間、その両方の味方をするということは、大きな矛盾を孕^{はら}んでいた。

「そして、大切なものに手が届かなくなった」

葉月も、こうだったのだろうか。記憶をなくした彼女も、こんなに苦しかったのだろうか。だとしたら自分は彼女のなにもわかっていなかったことになる。こんなにも辛いものだとは知らなかった。しかし和磨は、もう一度それを取り戻したいと思う。大切だったからこそ、もう一度手に届くところに置いておきたかった。

そこが、葉月とは違う。

やはり和磨は、葉月の考え方が理解できない。大切なものをなくしたなら、それを取り戻したいと願うのは当然だと思う。

「戸田と俺は、違うんだな」

それで自分は、彼女と距離を取ろうと思ったのだろうか。違うものとは、相容れることはできないからと。

『――』
考えごとにふけっていると、和磨の携帯電話がメール受信を知らせた。ディスプレイには、戸田葉月の表示。和磨は体がだるかったが、友人からのメールを無視するわけにはいかない。緩慢な動作でメールの内容を確かめる。

「なにもできなくてごめんなさい。また明日、学校で。おやすみ」
彼女にしては珍しく、絵文字もなにも使っていない、飾り気の無い文章だった。

「はあ、見たたのかよ……」

一人声を上げ、和磨は嘆息する。内容から察するに、自分の醜態を見られていたことになる。葉月は一部始終を目撃しながらも、なにもせずに立ち去ったようだ。

しかし今、メールをくれた。心から謝るかのように、無駄な装飾をせず、簡潔な文章で。葉月は自分の姿を見て、なにを思ったのだろうか……。

そのときふと、和磨は自分の心情の変化に気づく。少しだけ――ほんの少しだけだが、気分がよくなっている。

「戸田からメールをもらったただけか？」軽く笑いながら、一人呟く。

他に原因は考えられない。どうやら自分は現金な人間のようなのだ。さつきまで距離を取る……などと考えていた葉月からの気遣いで。

どうやらいよいよ自分はおかしくなったらしい。

何日か学校を休んでいる間、気持ちを整理しようと決めて、そのまま和磨は目を閉じ、淡い眠りへと落ちてゆく。

和磨の顔には、自嘲ではない、穏やかな笑みが刻まれていた。

四月二十五日水曜日。

鹿児島市の中でも比較的開発の進んだ場所にある鹿児島北丸高校。

この高校の校庭はとても広く、サッカーや野球などを互いに干渉することなく同時に行うことができる。

その校庭から見える、校舎にはめ込まれた無数の窓。その窓には授業中の退屈しのぎに校庭を眺めている生徒の顔がそこに写っていた。

その中、明らかに退屈ではなく、苦悩を顔に刻んでいる女生徒がいる。それは二年生の教室にいる、葉月だった。

（橘君、どうしてるのかな）

この日和磨は学校を休んでいた。理由は明らかだ。つまりは昨日の進一や稔との言い争いのことだろう。もし自分が彼の立場にいたらどうだっただろうか、葉月は考える。友人と話が噛み合わないのはとても辛いだろう。実際、あのときの和磨は見ていられなかった。

『――』

葉月が考えごとをしていると、チャイムが鳴り、授業の終わりを告げた。周りの生徒たちは昼食の準備を始める。昼休みの時間に入ったようだ。

「戸田さん？」

そのままぼーっとしていると、誰かが歩いてきて、話しかける口を開いた。

「え、なに？」

物思いにふけていた葉月は慌てて声の主を探すと、目の前に舞が立っていた。

「どうしたの？ 難しい顔して外を眺めてたようだけど」

舞は葉月の表情を覗き込むようにして訊いてきた。舞の背中まである髪の毛が流れ落ち、年齢に不相応なほど整っている顔が近づいた。

「うん、橘君は大丈夫かなって……」

自然とため息をつきながら、葉月の視線はまた校庭の方へ向けられていた。そんな葉月の様子を見ていた舞も、同じくため息をつい

た。

「単に人がいいのか、それとも彼のこと……」

「え、なに？」葉月は聞き返す。

「いいえ、こつちの話」

よそ見をしていた葉月は舞の声が聞き取れなかった。

教室内はいよいよ騒がしくなってきた。そんな喧騒も、葉月の耳には入ってこない。相変わらずぱっとしている葉月に、舞は若干呆れ気味に言う。

「戸田さん、そんなに心配なら彼と連絡取ってみたら？」

「え？ でも舞ちゃんが橘君を元気づけてくれるんでしょ？」

「あ、そうだったわね」

舞はうつかり忘れていた、と言わんばかりの表情になる。

「ちよつと舞ちゃん……」

「ごめんなさい。ちゃんと今日話をしに行くから」

「うん、お願いね」言いながら舞に笑いかける。

自分の顔を見ながら、申し訳なさそうに笑う舞を見つつ、葉月は思う。舞ならきつと和磨のことわかってくれるだろう、と。

「今日はご飯どうしましょうか？ 学食は人が多いし……」って戸田さん？」

葉月はまたしても外を見ていた。

午後七時。

和磨は近所のファミリーストランに来ていた。学校を休み、なにをするというわけでもなく時間を過ごしていた和磨は、舞に呼び出された。

もし、友人たちの仲を元に戻すことができなかったことを責められるのなら、和磨にはそれを受け止めなければならない義務がある。それがなにもできなかった自分が果たさなければならぬ責任だと思っていた。だからこそ彼はここにいる。

席に座って、舞を待っていると、一人の女性が店内に入ってきた。

いつもとは違う、制服ではない私服姿の舞だった。久しぶりに見る舞のその姿に多少見とれながらも、近づいてくる彼女の表情を見て、和磨は気持ちを引き締める。

進一と稔のことは、自分に責任がある。和磨はこれから、舞の辛辣な言葉を受け止めなければならないのだ。

舞は和磨の正面に座り、テーブルの上で頬杖をついた。学校では見られない彼女の仕草に戸惑ったが、和磨はすぐに余計な思考をやめ、舞の言葉を待つ。すると舞は、今までのなんの感情もない表情から、あの、こちらの全てを見透かすような目をした、人を心配するような顔になった。その表情に、和磨は疑問を感じる。

（今必要なのはそんな表情じゃないはず……）

ほどなくして舞が口を開く。「橘君、大丈夫？」

「は……え？」

てつきり責められると思っていた和磨は、自分でもわかるほど間が抜けた反応を返していた。思考がついていかない。

「ほら、昨日は大変だったんでしょ？」

「ああ……うん。確かに正直言ってきたいな」

和磨は思う。舞は、自分を心配してくれていたのだろうか。

「今日あなたが学校を休んだから、戸田さんも心配していたのよ？」

「そっか」

わざわざ自分のためだけに、舞は時間を使ってくれているのだろうか。和磨は胸の内に、なにか温かい感情が渦巻くのを感じた。

「ねえ橘君、皆の味方でいることは間違いじゃないと思うわ」そのままの体勢のまま、舞は言う。

「え……？」

先ほどから、和磨は舞の発言に驚かされていた。まるで自分の全てをわかっているかのようにだったからだ。

「あなた、それが間違いだと思いはじめてない？」

「確かに、うん」自嘲気味に言う和磨。

そんな和磨の様子を見、舞は少しだけ前に乗り出すと、和磨の瞳

を見据えて口を開いた。

「自分の行動や考えは、周りの人に迷惑をかけてしまうような、押しつけがましいこと。そもそもそんな矛盾を、いつまでも続けていいいいのか。事実、その自分の行動が、大切な友人を傷つけた」

「……」舞の言葉に、和磨は声を出せない。

「そして自分も傷ついた。自分が傷つくのはいいけど、友人が傷つくのは耐えられない。こんな思いをするくらいなら、自分の生き方を変えたほうがいいかもしれない。どう？」

「ん……」

舞の言う通りだった。和磨は、今日一日を使って自分の振舞い方を考え直していた。そして出した結論は、舞の言い当てたものと同じだ。

自分でも動揺しているのが、わかる。

「ああ、鎌田の言う通り……」

思えば、いつもそうだった。一年の頃から舞は、自分のことをわかってくれていた。あくまで自分だけではないが、ときには友達という枠以上の言葉をかけてくれたこともあったのを思い出す。

そんな舞は、優しく、「私もあなたの友達で、あなたの味方よ。

だからこそ言うわ。橘君は、間違ってる」

そこにあるのは舞の微笑。和磨になにかを諭すような、それでいて、包み込むような笑顔。

「ありがとう……」彼女の顔を見ることができず、うつむきながら和磨は答える。

「ええ。皆もそう思ってるはずよ、あの二人も、戸田さんも」

「そうだと、いいな」

それからどれだけ経っただろうか、今日あった出来事などを聞いていると、気づけば辺りは暗くなっていた。

「鎌田、ありがとう。少し楽になった」

和磨は舞に礼の言葉を言う。彼女の相変わらず真っ直ぐな長髪が、室内の照明の光によって煌めきを放っていた。

「そう、よかったわ。またなにかあったら言いなさい?」

「ああ」

また舞は和磨に向かって笑いかける。舞はきつと偽りのない、自分の本心を言っているのだろう。和磨は自分の心が温かくなるのがわかった。

「辺りも暗いし、そろそろ帰った方がよくないか?」周りを見回しながら、和磨は言う。

「ええ、そうね。それじゃ……」

舞は自分の注文した分のお金をテーブルに寄せ、「お勘定お願いね」と言いつつ立ち上がった。そして、

「ねえ、橘君。私のこと……好きになっちゃだめよ?」突然告げた。なに、いきなり……」

驚いた顔をしている和磨を、どこか苦しんでいるような表情で見ながら、舞は言葉を継ぐ。

「あのね……私、川上君……いえ、進一と付き合っているから」

照れているのだろうか、舞は和磨から視線を外して言った。距離としてはあまり近くないが、和磨にも舞の耳がわずかに紅く染まっているのがわかった。そして、

「またね」

背中まである漆黒の長い髪を揺らしながら、舞は立ち去る。なぜか和磨は舞の後ろ姿を見ながら、もう会うことはできないのではないのかと思った。

舞が店内から消えてからも、和磨は一人でぼんやりとしていた。

(まさか鎌田が川上と付き合っていたとは……)

今思えば、舞が彼を呼ぶときに何度か「進一」と言いかけたことがあったかもしれない。

しかしそれ以上に、和磨は違和感を覚えていた。先ほどの舞の言葉を聞いてから、和磨は小さな、けれど確かな喪失感を覚えていた。それは今まで感じたことのないもので、しばらく消えなかった。

四月二十七日、金曜日。

その日最後の授業時間中の鹿児島北丸高校は、静寂に包まれていた。その中の二年生のある教室で、葉月は窓の外をぼんやりと眺めている。

あれから和磨は、ずっと学校を休んでいる。舞の話によれば、和磨はもう大丈夫だという。あとは、彼が気持ちの整理をするだけだ。しかし葉月は限界だった。自分がこうしている間にも、和磨はなにかしら苦しんでいるかもしれない。そう思うと、なぜか自分も胸が苦しいのだった。

（よし、二人を説教だ！）

決断した後の行動は早い。葉月は進一と稔に、放課後帰らないで残っておけ、という内容のメールを先生にばれないように送った。

それにしても自分は どうしてしまったというのかと、葉月は思う。和磨の気持ちを考えると、心が痛くなる。今までこんなに他人に感情移入したことがあっただろうか、と。そもそもなぜそこまで考えてしまうのかと、葉月が自分の感情の名を詮索しようとしたとき、

「――」

チャイムが鳴り、授業が終わった。

この日は金曜日ということもあってか、少し待っていたらすぐに人はいなくなった。葉月と、進一と稔を残して。葉月は二人を手招きし、近くに座らせる。

彼らは相変わらずで、ここ数日は話しているのを見たことがなく、今も気まずそうな顔をしている。

「まず川上君、今のままでいいの？」

話しかけられた進一は、葉月から目を逸らして言う。

「なんの話だ？」

「上原君と、橘君のこと」進一の態度に悲しみながら、葉月はできるだけ落ち着いた声で言った。

「そいつらはもう他人だ。それに戸田、お前には関係ない」

進一は無表情で、かつ抑揚のない声で言う。きつとそんなはずは

ないだろうに、意地を張っているのかもしれない。

「じゃあ、上原君は？」

葉月に問いかけられた稔は、口を閉ざして、あのときのようににも言わない。ただ辛そうな顔をして。

なぜ、こうなのか。葉月は、悲しみを感じる。そしてゆっくりと二人に語りかける。

「橘君は、あなたたちの味方だった」

進一と稔は葉月と目を合わせないながらも、しっかりと話を聞いている。

「きつとあなたたちのことを大切にしていたんだと思う」

「……」二人は無言のままにいる。

「だから、あんなに必死にがんばったんだよ。なのに、あんな……」
「そんなの、知らねえな」相変わらずの声音で、進一は言う。

進一は、高校一年生の頃から和磨と友人だったと言っていた。その進一がこんな言葉を発するとは、葉月は思いもなかった。少しずつ大きくなっていく感情を必死で抑えながら、葉月は続ける。

「橘君はなにも悪くないじゃない。悪いのはあなたたち二人の方でしょ……？」

稔は相変わらず下を向いている。その表情は長い髪に隠れ、窺うことはできない。

「裏切ったのは橘君じゃなくて、あなたたちだよ……」

しかし進一は、「うるさい、もう終わったことだ」と静かに告げる。

葉月はもう我慢できなかった。立ち上がり、先ほどから激しく胸の奥底に渦巻いている感情を、そのまま言葉にする。

「ねえ、橘君の気持ち、考えたことあるの？ 友達のために必死にがんばって、けどどうしようもなくて……。それでも、あなたたちのことを考えてがんばることをやめなかったのにつ……！」

三人のみの教室に、葉月の悲痛な思いが響き渡る。どうしようもない痛みを胸の内に抱え、どうにか二人に気持ちを伝えようと、彼

女は必死だった。

「どうしてわかってあげないの……？ 今一番辛いのは橘君なんだよ？ ずっと学校にも来ないで、きっと考えてるんだよ。どうすればまた元に戻るのかって！ また笑い合えるのかって！ 今だっ てきつと、一人ぼっちで苦しんでるんだよ……！」

思いの全てを言葉に変えて吐いた後、葉月は自分の頬をなにかが流れるのを感じた。どうしようもない感情が、悲しみが、痛みが、一つの形となった瞬間だった。

しかしこうしている間にも、和磨は苦しんでいる。自分にはなに もできないのだろうか、この二人に、理解を促すことすらも……。

葉月はうつむいて両手を握り締め、震わせた。

すると視界の端、舞が教室に入ってくるのが見えた。

「女を泣かせるなんて、最低ね……」

舞は無表情で、こちらに近づいてくる。そして、進一に向かって言う。

「ほら進一、もうあなたの負けよ？ 素直に謝りなさい」

進一は舞の方を向き、これまでの無表情から、後悔の念を感じられる表情に変わる。そして葉月の目を見て、言う。

「降参だ。戸田、俺が悪かった。もう、素直になるよ……」

「うん……」 稔も続けて言った。

二人の言葉に、葉月ははっと顔を上げる。まるで今耳に入ったものが幻聴だと疑うかのように。そして幻ではないことを確かめると、葉月は顔を輝かせる。舞が「進一」と呼んだことが気にならなくなかったが、今大事なことはない。

その葉月の表情から申し訳なさそうに顔を逸らした進一は、そのまま稔に向き直った。

「稔、お前のことだからなにか理由があるってわかってた。けど、いつになっても話してもらえないから、俺は少しすねてたのかもな」
「川上君……」

稔の返事を待たず、進一は自分以外の三人を見渡し、宣言するよ

うに言う。

「皆、今から俺は橘……いや、和磨の家に行く。ついてきてくれるか？」

その確固たる意思を秘めた瞳と声音に、三人は頷いた。その場は、まるで皆の心が通じたかのような、不思議な高揚感に満ちていた。

（よかった、通じたんだ……）

最後に一筋だけ、その光る瞳から雫を流した葉月は、自らの内に溢れる喜びを、優しく抱き締めるように噛み締める。

夕日の色に染まった空は、晴れていた。

四月二十七日、午後三時。そろそろ夕刻に差しかかる、人が一日の終わりを感じ始める時間。

そのとき、和磨は学校には行かず、暗い静謐が支配している橘家の居間で、呆けたようにぼんやりとしていた。その頭の中を巡るのは、高校二年生になってからの数々の出来事。

（俺、どうしちまったんだろうな……）

ここ最近、和磨の身の周りの環境は著しく変化していた。そのお陰というか、先日とても気分が悪くなる夢まで見た。そのあやふやな、しかし確かにそこにある夢の記憶を辿る。

自分はなんのために生きているのか。

夢に他人の人格が入り込んでくることは常識的に考えてありえない。そのためあの夢で和磨に問いかけをしていたのは和磨自身ということになる。それはただ、和磨が深層心理で生きる意味を、目的を見失っているということを意味している。

どうやら相当参っているらしい自分を、和磨はまるで他人事のように自覚した。先日舞と話をした後、少しは楽になってはいたが。

和磨が虚空を眺めていると、二階から足音と共に人が下りてきた。一階に下りてきた途端に冷蔵庫の前に向かい、野菜ジュースをコップに注いでいるのは和磨の兄、明だ。

今日は仕事が休みであるらしい明は、和磨が聞き慣れた気の抜け

た声を発した。

「よっ、今日は激しくしけた面してんなあ？」

そう言いつつ、明はいつものように和磨の隣に座る。相変わらずだらけている様子だが、最近はそれに対しての嫌悪感は消えている。少しは尊敬できるようになった彼は、次の瞬間には突拍子もない言葉を発していた。

「で？ 女か？」

和磨は、突然の問いかけにまともに答えられない。

「は……はあ？」

その様子に、心底拍子抜けしたと言わんばかりの表情を浮かべた明は、さらに続ける。

「なんだ、違いのかよ。女といえばお前、あの写真まだ持ってるのか？」

勝手に期待して、勝手に拍子抜けしている明に若干腹を立てながらも、明の言った意味を理解した和磨は、

「持つてる。あの約束を忘れたこともない」揺るがない声で言う。

「ほーう。純情なことだ」

感心した様子で言う明。その言葉を最後に、二人の間には静謐が訪れる。会話が一区切りしたところで、和磨は思いついた。

（参考までに、聞いてみるか）

明は和磨の兄であり、和磨よりも多くのことを体験してきたはずだ。もしかすると、今の自分と同じような状況になったことがあるかもしれない。

「なあ兄貴、俺ってなんのために生きてるんだろうな？」

「はあ？ しけた面してたかと思ったら、そんなこと考えてたのかよ」

一応真剣な顔をして問いかけた和磨に対し、驚きと呆れを混ぜた表情を浮かべた明は、その顔を和磨に向けつつ答えた。

「ああ、悪いかよ」その態度に不信感を露わにした和磨は、口を尖らせ、そっぽを向いて告げた。和磨は我ながら、子供っぽいことこ

の上ないと思った。

「くだらねえこと聞くなよ。じゃあなにか？ 俺が『お前は俺のために生きてる』って言ったら信じるのかよ？」

明の答えに、今度こそ内心の不信感を大きくする和磨。それどころか和磨は、明に馬鹿にされているのではないかと疑ってしまうほどだった。その感情をなんとか抑えて言う。

「お前こそくだらないことを言うな。そんなわけないだろ」

すると明は、早くも飲み終わった野菜ジュースのコップを、テーブルの上で回しながら口を開いた。

「ほら、そうじゃねえか。人様の生きる意味なんてな、本人以外にはわからないもんなんだよ」

「あ……」

野菜ジュースを飲むのは早すぎるが、確かに明の言う通りだった。自分の生きる意味は人に決めてもらうものではない。自分で様々な経験をしていけば、自然に見えてくるものなのだろう。

自分の中の欠けていたピースが、やっと一つそろうような気分を味わった和磨は、驚きに歪めたままの顔を明に向けた。するとその顔を見た明は呆れるように、

「そういつこった。ったく、気をつけろって言ったのに見事に俺の忠告を無視しやがって……」手で頭を押さえつつ言った。

その言葉に、「忠告って……あっ！」必死に考えた和磨は思い出す。いつか明と話をしていたとき、『お前もついに高校二年生か。ま、気をつけることだな』と言っていた兄の姿を。

「そうだ。高校二年生は入学したばかりでもない、受験が近いわけでもない、中だるみの時期なんだよ。だから色々ややこしい出来事が起きたりするんだ。時間も有り余る頃だから、余計なことも考えちまうんだよ、今のお前みたいにな」

空になったコップを手にし、未だに呆れ気味のままで明は立ち上り、言葉を切った。

「あの言葉はそういう意味だったのか……」

一人納得した和磨は、やはり明にはかなわないと本気で思った。きっと自分では想像もつかないような問題に何度も直面してきたのだろうと想像する。社会という名の檻の中での、彼の姿を。

「俺は意味もなく話をしたりしねえよ。じゃあな」

その言葉を最後に、明は二階へと戻っていった。

今まで生きてきた道を語るかのような兄の背中を見送りながら、和磨は思う。今はまだうやむやだが、自分の生きる目的はきっと人の役に立つことだろうと。それは、和磨が幸福を感じる瞬間が他人に感謝されたときだからだ。しかし場合によっては、自分の行動が裏目に出てしまうこともあるだろう。

そう、今回のように。

だがそういうときは、人に感謝されたときの笑顔を思い出せばきつと耐えられる。

ひび割れた大地が潤いを取り戻すかのように、和磨の心は満たされた。自分の中の悩みごとが一つ減り、心が軽くなったのを感じた。舞と話をしたときと同じように。

（そうだ、あのとき……）

和磨は先日舞と話をして、舞の言葉を聞いた後、なぜか小さな喪失感を覚えた。そのことについて、自分が出しうる最高の答えを考える。

そもそもなぜ喪失感などを感じたのか。喪失感とは、大事ななにかを失ったときに感じるもの。大事ななにかとは考えてみる。そのときに自分の置かれていた状況を思い浮かべ、和磨は一つの結論に辿り着く。

（まさか、鎌田のことだろうか）

舞のあの言葉によって自分が失ったもの。それはもしかしたら、舞を好きになってもいいという可能性だったのかもしれない。いや、そう思うと辻褃が合う。その答えに、今さらのように和磨は自覚する。

自分は、舞に惹かれていたのだ。

あのなににも負けない、正しき綺麗な立ち姿に。芯の強さを表すような、流麗な漆黒の長髪に。そして自分の内側をありのままに写してくれていた、その瞳に。しかしそれはもう叶わない。他ならぬ彼女自身がそう告げたのだから。

もしかするとあのとき舞は、本人ですら気づいていなかった和磨の気持ちを察していたのかもしれない。それで、釘をさしたのだ。自らの気持ちに気づいた途端、和磨はあのときと同じ喪失感を覚えていた。決して小さくはない痛み。ともすれば全てを呑み込まれてしまいそうな痛みを。

しかし、それはもはや終わったこと。そう自分を納得させつつも、これ以上の痛みには耐えられないと感じた和磨は、無理矢理に自分の思考を反転させる。

そう、今はこんなことを考えている場合ではない。稔と進一の仲直りの方法を考えなければならぬ。決意を新たにしつつ、和磨は一人、夕暮れの色が濃くなった自分の部屋へ行き、ベッドに寝転んだ。

その部屋にある机の写真立てでは、まるで和磨を見守るかのように、少年と少女が手を取り合って笑っていた。

橘家を包んでいた静寂を破るかのように、辺りに響き渡る電子音の呼び鈴。その音に半ば反射的に行動し、和磨はドアを開け、来客の応対をする。

「はい、どちら様でしょうか？ …… あ」

ドアを開けることによつてできた狭い隙間から、ひよいと顔を覗かせたのは、「ごめんね、皆で来ちゃった。今、お邪魔してもいい？」葉月含め、友人四人だった。

「ああ、構わないよ。どうぞ」

そう言つて、和磨は葉月たちを家の中へと通す。その中には、仲違いをしていたはずの稔と進一の姿もある。その二人の様子は、別段気まずいというわけでもなさそうだった。

和磨は疑問に思う。彼ら二人は自分が原因で関係が悪くなってしまったはず。自分が学校に行っていない間に、なにがあったというのか。

「ま、皆そこに座れよ」

言いつつ友人たちを居間へと案内し、和磨は誰かが口を開くのを待った。皆でやってきたのには、きつとなにか理由があるだろうから。そのため和磨は、自分が最初に口を開くべきではないと感じていた。

「今日は二人から、橘君に言わないといけなことがあるんだよね？」

静かな沈黙を破ったのは、葉月だった。その声音はどこか厳しいもので、また、どこか穏やかな色を含んでいた。そしてその声を聞いた二人は、意を決したような顔になる。

和磨は二人の間に、いや、彼らの間になにがあったのか全く想像できなかった。が、その後の進一と稔の言葉によつて、さらに驚かされる。

「和磨、俺が悪かった、許してくれ……！」

「橘君、悪い態度をとつてごめんなさい」

言いつつ、進一と稔は頭を下げた。その姿を見た和磨は、ますます固まった。

わけがわからずに座っている女子二人を見ると、舞の方は微笑しており、葉月はなぜか腕を組み、口をへ字にしていた。その様子を見、さらにわけがわからなくなったが、とりあえずこのままにしておくわけにはいかなかったので、和磨は口を開くことにした。

「わかった、わかったから二人とも顔を上げてくれ」

「ああ……。それじゃあ稔、この場であの日なにがあったのか、話してくれ」

和磨の言葉に、進一は答える。そして稔の方を向くと、静かに告げた。

「うん。あの日、僕のおばあちゃんが倒れたんだ」

「な……」和磨は驚く。

皆が息を呑むのを感じる。その中で舞は質問する。「おばあさんは、大丈夫だったの？」

「うん、幸いにもね。僕はおばあちゃんがすごく大切だから、それで気が動転しちゃって、他のことをなにも考えられなくなっただ」
「それで、川上君には連絡しなかったんだね？」葉月は確認した。
「うん、そう」

「でも、どうして進一に後から謝らなかったの？」
わずかに首を傾けつつ、今度は舞が問いかける。艶やかな彼女の髪が揺れた。

「それは……」

言い淀む稔を見ながら、和磨は思う。稔は自分と同じように他人を大切にする人だ。今なら稔の考えていることがわかる。確信しつつ和磨は口を開いた。

「理由はどうあれ、自分は友人を裏切ってしまった。確かに話せばわかってもらえるだろうが、それでは相手に甘えるのと同じ……。そう、考えたのか？」

すると意外そうに稔が目丸める。その驚きの表情を刻んだ稔は、いつもよりも増して、実年齢以下に幼く見えた。

「あ、うん……。橘君の言う通り」

そう言った稔の目を見つつ、進一はその強面の顔に納得した表情を浮かべ、

「そうか、確かに稔の言うことにも一理ある。だがな——」少し不満そうに言う。

「だけど、なに？」稔が先を促す。

「俺はそんなこと気にしない。言ってくれば、納得したんだがな」少し困ったように笑い、稔にその柔らかな笑顔を向けた。

「うん、ごめん、川上君。で、ありがとう」

「おうよ」

わだかまりが完全に解けた様子の二人。その光景を見ていた和磨

は、ようやく帰結を迎えた事態に、喜びを噛み締めながら胸を撫で下ろした。

すると、話をまとめるように稔が口を開く。

「それじゃあ改めて、橘君と川上君、これからよろしくね」

「ああ」その言葉に、静かに、しかしはつきりと頷く和磨。

続いて進一も言葉を返す。

「当たり前だ、よろしくな、稔。そして――」

言いつつ進一は和磨の方に視線を向け、まじまじと和磨を見た。

「和磨、今回は俺が悪かった。確かにお前は俺たちのためにがんばってくれてただけなんだ。それを俺は……ひどいこと言っちゃったよな。すまん」

これまでのすべてが、報われるような気がした和磨。心に染み渡ってくるその言葉に、和磨は大切なものを手にした気がした。そしてその気持ちを確かにしながら、

「ああ、またよろしくな、進一」笑みを浮かべて苗字ではなく名前で呼んだ。

すると口出しせずに見守っていた舞が、わざとらしくため息をつき、体を伸ばしながら言った。

「これで一件落着ね。はあ、疲れたわ」

そんな彼女に、楽しげにに相槌をうつ葉月。

「はは、でもよかった。ところで舞ちゃん、さっきから気になってただけど……」

「なに？ 戸田さん？」伸びを止めた舞は、葉月の言葉を待つ。

「川上君のこと、進一って呼んでない？」

その葉月の言葉に、舞はなんでもないことのように答えた。

「ああ、私と進一、付き合ってるの」

「――っ！」

皆の声にならない悲鳴が重なる。もつとも、和磨は知っていたのでその中には入らなかったが。

その後、取り留めのない話をして、夜も遅いので解散することに

なった。

「私、橘君に話があるから皆は先に帰っていて」

「そうか、なら俺は外で待つてるぜ」

舞は家の中に残り、他の三人は外に出ていく。

しかし、舞の話の内容がなんなのか、和磨は全く心当たりがない。先日も恋愛対象から外せと言われたばかりだというのに。そんな和磨の思いをよそに、三人が立ち去ったのを確認した舞は、和磨に向かって告げた。

「橘君、一つだけ言っておきたいことがあるの」

「なんだ？」

もったいぶった言い方に、和磨は多少焦れて先を促す。

「二人を仲直りさせるために説得したのは、戸田さんよ」

「え……そうなのか？」

瞬間、和磨は二人の仲が急に元に戻ったことに納得した。

「ええ。彼女が説得するまで二人は険悪なままだった。それを彼女は一人で説得した。涙まで流してね」

「涙を……？」

その言葉に、和磨は自分の胸が大きく波打つのがわかった。

「そう。橘君の気持ちを考えたことあるのかって、彼は今も一人で苦しんでいるって」

まさか葉月がそこまでしていたとは想像もしていなかった和磨は、呆然とした。後ろ向きな申し訳ないという思いより、暖かい感謝の思いが自然に押し寄せてきた。そんな和磨の内面を知ってか知らずか、舞は続ける。

「私は元から人の心を読むのが得意だけど、彼女は誰よりもあなたの心を理解しようとしている人のようね？」

「ん……」

和磨はそれ以上の言葉を返せない。まず思考が追いついていない。

「ま、これから先は自分で考えることね。それじゃ、私は帰るわ」

そう言った舞を玄関まで送り、和磨は挨拶をする。

「じゃあ、また」

「ええ、おやすみ」

そう言った舞がドアを開けた先、進一が待っていたのが一瞬見えた。

和磨は居間へ戻りながら、今回の出来事の一歩の功労者かもしれない人の名を思い返す。

「戸田、葉月……」

呟くだけでなぜか温かい、その名を。

「やっと一区切りついたか……」

閉じた玄関の上、橘家の屋根の上に、一人の男性の姿があった。まるで他人事のようにそこから見える風景を見下ろす男性の名は、九天という。

「様々な出来事が起こり、収束していく。どんなことが起ころうとも、運命の歯車を回しながら時は流れる」

周りに多く立つ家々と同じように、薄汚れた瓦に覆われた橘家の屋根の上で、静かに澄み渡り、不思議な清々しさのある夜の空気の中、どこことなく寂しく見える住宅街を見つめている九天の姿は、まるで世捨て人そのものだった。高い場所にいるからか、あるいはその世の中にまるで干渉しない雰囲気からか、彼の姿に気づく者はおらず、当然ながら彼の邪魔をする者もない。

その自らの置かれた状況を楽しむように、悲しむように、九天は低く響く声で言霊を吐く。

「しかし彼はきつと気づく」

言った後九天は空を見上げた。煌々と輝く星々の住む、天蓋の夜空を。その世界の中にある月を見つめる彼の目は、まるで追い求める理想郷を幻視するかのよう。

「あの日の約束は、残酷な運命によって阻まれていることを――」
その目に月を映したまま、九天は跳躍する。

届くはずのない、約束の地を目指すかのように。

第六章

たくさんの街路樹と、多くの車などの交通。二つの相反するものが存在するちぐはぐな場所——ここは鹿児島市の市街地。相変わらずの喧騒に包まれているこの場所を、若い男女五人のグループが歩いている。

男性三人が前を歩き、女性二人が後ろについて歩く。二人いる女性の一人、葉月は、前にいる和磨の背中を見ながらぼんやりと歩いていた。彼女の隣を歩いている舞が携帯電話を取り出す。その待ち受け画面の日付は四月二十九日、午前十一時三十分。

対する前を歩いている進一と稔は、何か和磨と話をしている。その内容を聞き取るうとするための集中すら、葉月はしていなかった。

「戸田さん？」

「うにやつ？」突然の声かけに、慌てて反応を返した葉月。

「どうしたの？ ぼーっとして。それに『うにやつて……なに？』

「ご、ごめん。楽しまなきゃだめだよ」

恥ずかしさから微妙に話を逸らしながら、葉月は舞に笑顔を向ける。彼女たち五人は、稔と進一の仲直りを祝おうということで市街地に遊びにきていた。集合してから十分も経っており、皆でぶらぶらと歩いている。

「戸田、今変な言葉が聞こえたけど……？」

「気のせいだよ、気のせい」

またしても誤魔化しながら、葉月は思う。和磨は相変わらず細かいところを気にしてくる。しかし葉月は嫌悪感を感じているわけではない。

「おい稔『うにやつ』だってよ」進一がわざとであろう大声を上げる。

そんな進一に対して稔は、「川上君、そんなこと言っちゃだめだ

よ」と、言葉とは裏腹に笑顔を浮かべている。

「もー、二人とも馬鹿にするなー」

頬を膨らませ、取り留めのない会話をしながら、葉月は思う。また元に戻れてよかったと。これからはこの日常の大切さを理解していられるだろうと。

そう考えていると、前を歩く自分よりも背の高い背中——和磨から声がした。

「とりあえずなにか食べてから行動しないか？」

振り返りつつ言う彼の、男子の平均よりは少し長い髪の毛が揺れていた。その姿に少し見とれていた葉月は、隣で発せられた舞の声を聞いた。

「そうね。なら……たこ焼きを食べに行きましょう」

その言葉に、急に嬉しくなった葉月は、

「あつ、舞ちゃん覚えてくれてたんだ」自分でもわかるくらいに、元氣な声で言った。

「ええ、楽しみにしていたでしょ？ 美味しいのよ」

いつしか舞と市街地を歩いたとき、皆で食べに行こうと約束したたこ焼き屋。あの舞が美味しいと言うのだから、きっと期待してもいいだろうと、葉月は頬を緩ませる。

そうこうしながら、五人は歩いてそのたこ焼き屋に向かう。途中電子音の鳴る横断歩道を渡り、交通量の多い道を眺めながら喋っていると、大して時間もかからずに目的の場所に到着した。

それぞれに注文を済ませ、席について待つ。もつとも葉月はそこに来たのは初めてだったので、舞の勧めに従って商品を決めたのだが。

しばらく他愛のない会話をしていると、あまり待たされないうちに頼んだ品物が届いた。葉月たちの目の前にあるそれからは、ゆらゆらと湯気が立ち上っていた。いただきます、と手を合わせて言った葉月は早速それを味わう。

「舞ちゃんの言う通り、美味しー」

口の中にあるものを飲み下してから、葉月は素直な感想を述べた。
「だから言ったでしょう？ みんなで来れてよかったわね」

「ああ、そうだな。和磨もそう思うだろ？」自らもたこ焼きを味わいながら進一が言った。

「その意見には賛成。だけど戸田、がつつきすぎじゃ……？」

進一に話題を振られた彼は、若干呆れたように目線を葉月へ向けていた。その言葉を稔に、「橘君、女の子にそんなこと言っちゃだめだって」と注意される和磨。

そんな様子の彼らに、葉月は笑いつつ、素直に答える。

「だって、美味しいんだもん」

その後一時間ほどそこにいたが、葉月はその時間がとても短く感じた。世間でよくいわれる、楽しい時間は早く過ぎるということを身をもって体験した。

そして昼食を食べ終わった後、また外を歩く。しかし今度は、明確に目的地のある行動だった。昼食中の舞の提案により、皆でカラオケを目指している。「カラオケにはよく行くの？」などと舞に聞きつつ、葉月が他の四人について歩いていると、そう遠くない場所にそれはあった。

受付を済ませ、指定された部屋の中へ入っていく一同。心なしか、皆の様子は楽しそうに見える。いや、まさに楽しいのだろう。

「うーん、なにを歌おうかな……。川上君、早く歌いなよ」

「よし、一番手は任せろ」

稔に背中を押された進一は歌いだす。その間に他のメンバーも歌の番号を入れていく。

「あら？ 戸田さんは歌わないの？」

「うん……。私、聞いている方が好きだから」

愛想笑いを浮かべつつも、実を言うと葉月は困っていた。自分は記憶喪失であり、知っている歌の大部分を忘れてしまっている。それでも最近の曲はわかるのだが、さすがにわかるものは少なかった。（このことを言ったら、皆に気を遣わせちゃうよね……）

自分は不快感を感じているわけでもなかった。葉月は黙っていた。そうしているうちに時間は過ぎ、和磨の番が回ってくる。

皆、歌が上手だなと感心している間に、和磨が歌い始める。それは、離れている恋人に贈る切ない歌だった。

普段の声とは違う、優しく、人の心に染み渡るかのような声音。

そんな和磨の歌を聞いていた葉月は、自分がこの曲になにかを感じているのに気づいた。しかし、少なくとも自分が知っている曲ではない。なんとなく懐かしい感じがするだけ。

そのことから、自分が記憶を失う以前に知っていた曲なのだろうと見当をつける。意識せずとも歌詞の世界に引き込まれ、自然に葉月は目を閉じる。

歌を聞いているうち、葉月の意識はだんだんとぼんやりしてくる。確かに人の声が耳には入っていても、その内容を理解できていない。そしてなんとなく、自分が懐かしさを感じているのはその曲自体ではなく、その曲を歌っている和磨のように感じてる葉月。そんな彼女はそのまま眠ってしまう前に意識をはっきりさせておこうと、瞼を開く。

完全に目を開けると、和磨がぼやけた少年の姿に見えた。

「ん……？」

思わず疑問を声に出しつつ、葉月は焦ってもう一度瞬きをする。和磨は元の姿に戻っていた。自分は疲れているのかもしれないと思いつつ、少し火照ってきた顔をほぐす。すると隣に座る舞が話しかけてきた。

「戸田さん？　どうかしたの？」

「ううん、なんでもない。ありがとう」

彼女の気遣いに答えつつ、しかし気がつくと和磨は歌い終わっていた。すぐに次の曲のイントロが流れ出し、稔が歌い始める。

葉月はもう一度、ただ純粹に、和磨の歌が聞きたいと思った。

カラオケで四時間も時間を使い、和磨たちは喫茶店に入っていた。

「楽しかったねー」と稔。

「おう、また来ようぜ」こちらは進一。

自分たちの好きな飲み物を飲みながら、皆は談笑していた。周りの会話に耳を傾けつつ、和磨はつい数時間前のことを思い出す。

実のところ、和磨は一昔前の歌しか歌わなかった。最近の歌を知らないわけではないが、どうも薄っぺらく感じてしまう。その点和磨の物心がついた頃の歌は、今歌っても伝えたい思いがわかる。それで少し古いものばかり歌っていたのだが、そんな中、彼は不思議に思っていた。

葉月是一曲も歌わなかった。

皆に「上手だねー」などと言っていたが、なぜ歌わなかったのだろうか。和磨は途中から葉月が歌っていないのに気づいたので、彼女の様子を時々伺っていた。そして一つ気づいたことがある。

（俺が歌うとき、何度か目を閉じてたんだよね……）

そう。理由はわからないが、彼女は和磨が歌うとき目を閉じていた。それは例えるなら、過去の思い出に浸っているような、そんな穏やかな表情だった。すると突然、

「おい和磨、聞いてんのか？」

和磨の頭の中に進一の声が響いた。その言葉に、和磨は自分の思考が遊離していたことに内心舌打ちしつつ、慌てて返事を返す。

「あ、悪い。なんの話だっけ？」

「暗いから解散しようって話だよ。いいだろ？」

すると進一は大して怒っている様子もなく、普通に言い直してくれた。この辺のことで腹を立てないのが進一のいいところだと思いながら、和磨はいつもの声音で言葉を返す。

「ああそうだな、わかった」

どうやら和磨待ちだったらしい皆で会計を済ませ、外へ出る。日はすっかり暮れていたが、辺りの街灯に照らされている通りは不自然に明るかった。

全員ここからは家が遠いので電車に乗って帰ることになる。

自然と皆は駅へと向かう道を歩く。他の人の他愛のないの会話を耳にしながら、和磨は夜空を見上げる。

そこに光る星は、街灯によって霞んでいた。

「それじゃあ、またね」

進一と稔と舞は乗る電車が同じであり、三人とは改札口で別れる。
「またな」

挨拶を交わして別れてから、和磨は切符を買って改札口を通り、ホームにあつたベンチに腰を下ろす。乗る予定の電車はまだしばらく来ない。

「電車来るまで、暇だね」

気がつくと葉月が隣に座っていた。葉月も和磨と同じ方向なので、途中までは同じ電車に乗ることになる。

「ん……、だな」

辺りは夜の静けさに包まれている。日が暮れているとはいっても、中途半端な時間なので電車を待つ客は少ない。特にやることもなくなった和磨は、葉月にはわからないように、彼女の方を盗み見る。

目につくのは肩まである漆黒の麗髪と、真っ直ぐな瞳。顔つきは凜としているが、相変わらずどこか儂い。なにが彼女をこうも脆く見せているのか——和磨が思いつく要素は、記憶喪失しかない。

葉月は今もこうして普通に振舞っているが、人目のないところでもそうであるとは限らない。もしそうだとしたら、苦しいときは言っただけだと思ふ和磨。

今まで彼女から、そんな話をされたことはない。今はまだ、葉月からの信頼も薄い、と和磨は自分でも思う。しかしそれも、時が解決してくれるだろう。

（もし頼ってくれたときは、親身になって話を聞こう。それだけのことを、俺はしてもらったのだから）

「うん？」

疑問の声と共に、葉月が和磨の方を向いた。気づかないうちに、

和磨は彼女の方をずっと見ていたようだ。

少し困っているような、笑っているような、そんな表情。葉月の顔に刻まれた表情に、なぜか和磨は既視感を覚えたが、

「間もなく、電車が到着します……」

構内に響き渡るアナウンスの声に、思考を現実へと引き戻された。目の前には、こちらを向いたままの葉月の顔。

「悪い、なんでもない」

未だに首を傾げ、不思議そうにしている葉月にそう告げていると、ほどなくして電車が到着し、二人はそれに乗り込む。すると駅のホームと同じように、人は少なかった。特に話題もないので、和磨は隣にいる葉月に対し、口を開いた。

「戸田、どうして歌わなかったんだ？」

和磨の質問に、葉月は驚いた。自分が歌っていなかったこと、それを彼が気づいていたことに対して。

「うん……」

和磨の言葉に、葉月は迷う。本当のことを言うか、誤魔化すか。本当のことを言えば、この後の会話の内容は少し暗いものになるだろう。

「言いくいのか？」

「まあ、ね」

言いつつ彼女は思う。そんな状況になるよりは、他の話題を探した方がいいと。その結果、学校の授業のことでも話そうと思った葉月は、自らの口を開きかけたが、

「なら、話せよ」

和磨の言葉に遮られた。

他の人なら、相手の暗い部分まで話させようとはせず、触れそうになったら適当に誤魔化そうとする。それを相手の好意と受け取る人もいるだろう。葉月も、そう考えることはできる。

けれど、本当は。

葉月は、誰かに話を聞いて欲しかった、本当の自分を理解して欲しかった。本当は、皆の中で自分だけ歌わない、いや、歌えないというのは寂しかった。

そんな本当の胸の内を、彼は聞いてくれると言った。やはり和磨にはかなわないと思いながら、葉月は理由を語る口を開く。

「私、歌も一緒に忘れちゃったから。本当は、ちよっと寂しかったり……」

「あ、それで……か。確かにそれは、寂しいな……」

葉月の言葉を予想していなかったのか、和磨はばつが悪そうに、少し視線をずらす。その表情からは、どんな言葉をかけるのがいいか思案していることが伺える。そんな彼の表情を見ていたら、なんとなく自分が悪いことをしているような気がしてくる。考えている様子の和磨の姿に感謝しつつ、葉月は取り繕う言葉を継ぐ。

「でもね、最近の曲は知ってるから、楽しめたよ。それに聞く方が好きっていうのは本当だし」

言つと、思案の表情を浮かべて若干下を向いていた和磨は、すぐに顔を上げて相槌をうった。

「でも、俺の歌ったやつはわからなかっただろうな。少し古いのばかり歌ったから」

そんな彼の言葉に、葉月は自然と言ってしまう。

「あ、でもなんとなく懐かしい感じがした曲はあったよ」
しかし、

「はは……それで俺が歌つてるとき、何度か目を閉じてたんだな」
葉月は自ら墓穴を掘ったことに気づいた。

「え……嘘、見てたの？」
「ああ、目に入ってた」

まさか見られていたとは思わなかった。自覚した途端、顔が熱くなってくる。それが和磨にわからないように、葉月はゆっくり下を向く。そんな彼女の心中を知ってか知らずか、彼は言った。

「また行こうな、カラオケ」

「うん……」

沈んだ倦怠感が薄く漂う電車の中、電車の振動に合わせて天井灯は明滅し、葉月が盗み見た和磨の顔に影を作る。

和磨はきつとこれからも、今のように人の味方であり続けるのだろう。誰にでも等しく優しく、親切にするのだろう。それが正しい生き方なのかは葉月が決めることではないが、少なくともそれが悪いとは思っていないかった。

（本当、どうしようもなく優しい人……）

そうして葉月が目線を窓の外に移してぼんやり考えていると、

「なあ、どの曲が一番懐かしく感じたんだ？」

突然和磨に話しかけられ、慌てながら和磨の方を見、言葉を返す。

「あつ、あの最初に歌ったやつ」

「そうか、あれか……」

微妙に心中の動揺が出てしまった葉月の言葉を気にもせずになんと言った後、和磨は窓の外を見た。そんな和磨を見た葉月は、彼がどこか、自分の知らない世界を見ているような気がして、不安を覚えた。その不安を打ち消すように、葉月は言葉を選ぶ。

「なにか、思い入れでもあるの？」

「ああ、昔のことだけど。何人かで仲良しグループを作ってた。そいつらによく歌ってと言われてた。その中には公園で知り合った……ってこんな話、つまらないよな」

「ううん、そんなないよ」

葉月は事実、その話をつまらないとは思わなかった。不思議と自然に、自分の頭の中にその情景が浮かび上がっていた。

「ま、とにかく思い出の曲なんだ」

しかしそれを取り繕いの言葉と受け取ったのか、和磨は言葉を切った。そして彼が喋り終わると同時に、電車が止まる。葉月はここで降りなければならぬ。

「それじゃ、私ここだから」

「ああ、また」

軽く手を上げる和磨に笑いかけながら、葉月は電車から降り、ホームに足をつける。話を聞いてもらったお礼を言おうとして振り返ったが、既にドアは閉まり始めていた。

葉月の視界の中でドアが閉まり切る直前、和磨と目が合う。その日最後に見た彼の目は、

「え……？」

葉月ではない、なにかを見ていた。

（あ、あれ……）

そして葉月は、胸の中で疑問の声を上げる。心の内に湧いた疑問は、いつもと違う様子の和磨に対してではなく、なぜか寂しく感じた葉月自身に対するものだった。

人気のない電車の中、和磨は一人で過去を顧みる。

あの子はどうしているだろうか。一方的に別れてしまつて、それきり連絡をとることもできずにいる。だいぶ前の話なので、もしかしたら忘れてしまつているかもしれない。

しかし和磨は覚えている。あの日に交わした約束を。

彼女が自分のことを覚えているにせよ、忘れているにせよ、自分にはなにかしらのけじめをつけなければならぬ。そのために自分は今でも約束を覚えている。彼女の名前を覚えている。もっともそれは、ニックネームではあつたが。

それでもきつと、いつかまた会えると信じて、今日も和磨は思う。幼い恋ではあつたが、確かにそこにあつた、真実の時を。

今日一日を生き抜いた人間たちを乗せ、電車は走る。その中の一人、和磨は、穏やかな表情を刻みながら眠りへと落ちていた。

駅からの帰り道、葉月は一人で歩きながら思う。あのととき、なぜ寂しく感じたのかを。

彼が自分を見ていてくれなかったからか。自分はそんなに、和磨に見ていて欲しかったのだから。あるいは単に、彼と別れるのが名

残惜しかったのだろうか。自分はそんなに、彼と過ごす時間が大切だったのだろうか。

しかし、そのどちらだったとしても、そのような思いを抱く葉月が、心の中で渦巻かせている感情の名は、一つ。

それは優しく、激しい思い。そして温かく、寂しい気持ち。さらには今のままでいたいと思いつつも、それ以上の間柄になりたいと願う矛盾。

（もうわかってる……）

思い返せば、進一と稔の仲が悪くなり、和磨が落ち込んでいたとき。自分は彼が気になって仕方がなかった。

正しくも脆い生き方をしている彼が。壊れそうになっていた彼が。これはきつと、既に友達に対する思いを超えている。けれどももう少し。自分の気持ちに気がつかない振りをしよう。

もしかすると勘違いなのかもしれない。彼は、自分に優しくしてくれたから。その感謝の気持ちとごちゃ混ぜになっているのかもしれない。だから、葉月は決心する。もう少しの間、自分はこの気持ちを知らないでいよう、と。

日が暮れ、不気味なまでの静けさに包まれた道を歩きながら。我知らず、葉月の顔は苦痛に歪んでいた。

葉月が降りた駅のホーム、そこで一人、孤独に直立する長身の男——九天は、葉月が歩き去った後の場所を、そこになにかを見出すかのようにずっと見つめている。

そんな彼の口から、低くてどこか事務的な、しかしわずかな人の温もりを残した声が響く。

「穏やかな日常、それぞれに渦巻く感情。彼はまだ、気づいてはいない」

言いつつ、彼の口が弧を描く。

それは誰に対する嘲笑かもわからない。他人か、あるいは自分自身に向けたものか。

「彼女はまだ、気づこうとはしていない」

短くはない銀髪を逆立たせ、春の夜風にコートをなびかせる彼は、
なおも独白をやめない。

「この違いが生むのは運命の邂逅か、苦痛の別離か。その程度の未来すら見ずに娯楽にすると、ついに私も狂ったか――」

今でははつきりと自嘲の笑みを刻んでいる九天は、そのまま駅の
出入り口に向かって歩き出す。

すると透明度の高い夜の空気に甲高い足音を響かせる彼の姿は、
長い時も必要とせずすぐに宵闇と混ざった。その様子は、まるで彼の
存在が闇そのものであるかのようにだった。

第七章

《今暇？ ちよつといい？》

携帯電話を操作し、葉月は届いたメールの内容を確認した。差出人は和磨。ディスプレイに表示されている時刻は五月六日、午後十時三十分。

《いいよー。ゴールデンウィークももう終わりだね》

文字を打ち込み、送信ボタンを押す。そして枕元に置き、葉月は一息ついた。入浴を終えたばかりだったので、彼女はベッドに座り、髪をけずっているところだった。

ゴールデンウィーク中、葉月はまた五人で遊んだ。それ以外は家族と過ごしたり、買い物をしたりパソコンを使ったりして時間を過ごしていた。そして早いものでもう休日は終わり。明日からは学校であり、絵に描いたようなブルーマンデーとなりそうだった。

《月並みな言葉だけど、休みが終わるの早かったな。明日は時間割変更で、数学あるから忘れないように》

こちらの休みボケを心配しているのだろうか、和磨は葉月も知っている情報を伝える。

《大丈夫だよ。もしかして、私が忘れるとも思っただの？》

髪をとかし終わり、葉月は明日の準備を始める。現代史、地理、英語……そして忘れずに数学のテキストを鞆の中に入れる。

そんな彼女の視界の中、葉月の机の上は綺麗に整頓されていて、何枚か写真が飾ってある。家族と写っているものや、現在通っている学校のものなど。そして中には葉月の記憶に残っていない自分の姿——彼女の幼い頃の写真もあった。

《いやいや、念のため。戸田は、どこか抜けてるところがあるから》引き出しの中から一枚CDを取り出し、コンポで再生を始める。スピーカーから、女性歌手の澄んだ歌声が流れ出した。

《いくら記憶喪失でも、忘れっぽくはありませんよーだ》

和磨のメールに少しむっとしたので、「記憶喪失」という言葉を使ってみる。真面目な彼のことだから、少し困るだろう。

緩い笑顔を刻みながら、葉月は送信ボタンを押す。一人だけで携帯電話を見ながら笑っている自分に、気色悪さを感じながらも、葉月は椅子に座り先日学校で借りた本の続きを読む。

《悪かったって。それにもう、戸田は記憶喪失をあまり気にしてないだろう?》

液晶画面を見つつ、葉月は思う。確かに和磨の言う通りだ。最近普通の女子高生として生活できているという自覚がある。自分はどうか、記憶喪失から一歩先に進んでいるようだ。

《うん、そうだね。でも「仕返し」だよ。私を馬鹿にした罰》

さらにメールを続け、葉月は本の続きを読む。その本の中では、ある女の子と男の子が、勘違いから互いに距離を取ってしまう場面だった。それを勘違いだと知っている読み手としては、切なくて、歯がゆい。

《もう、だから悪かったって。そういえば、そろそろ好きな人とかは? 俺としてはなんでも話せる人は必要だと思っただけど……特に戸田の場合は》

葉月は、少々驚いた。

しかしメールをよく読むと、葉月のことが好きだから想い人がいるのか聞いたのではなく、ただ葉月のことを心配しているからこそその質問のようだ。

人としては後者の質問の方が嬉しいかもしれない。しかし葉月個人としてはどうだろうか。そのことを考えようとした葉月はしかし、首を振って思い直し、ボタンを押して文章を紡ぐ。

《ううん、いないよ。でも川上君と舞ちゃんにはびっくりだよね》
意図的に話を逸らす。これ以上自分のことについて話させられると、自分の全て、もしかするとまだ自分自身すら完全にわかってないことまで引き出されそうで、葉月はそれを恐れていた。

しかし、いつも通りの和磨らしい質問だった。相変わらず他人の

ことばかり考えている。少しは自分自身のことも考えているのか、葉月は考える。と、そこで気づく。

先ほどから和磨のことばかり考えている自分。それを別段悪いこととは思わなくても、そういう思考を恐れている自分も、葉月は確かに感じていた。そんな今までの思考を振り払うかのようにして、本に目を移す。

部屋の中は女性歌手の歌声が響いていて、時間はゆっくりと流れている。先ほどより和磨の返信が遅い気がしたが、そんなことはとりあえず思考の隅に追いやって、葉月は目の前に広がっている活字の世界に集中した。

しかし、そんな静寂も破られる。和磨からのメールによって。

《……戸田、今、わざと話を逸らさなかった？》

その文面を見た葉月は、一瞬息が詰まった。彼女の周りでゆっくり流れていた時間が、止まってしまったような気がした。

和磨に、言い当てられた。

その事実嬉しいような、困ったような、自分でもよくわからない感情が心の内に渦巻く。そんな自分の気持ちを持て余しながら、葉月はこれ以上メールを続けていると和磨に心の中を全て見透かされてしまうような気がした。だから心の中で謝りつつ、

《そんなことないよ。ごめん、お風呂入るからこれで。おやすみなさい》

無難な言葉を並べ、もう入浴は済ませたというのに、葉月は嘘をついた。胸の内に広がるわずかではない痛みをわざと無視するかのようには携帯電話を置き、無理矢理に読書を再開する。

葉月の読んでいる本の中の登場人物のすれ違いは、決定的になっていた。

葉月は駅に立ち、一人困っていた。

日付は五月七日、時刻は周りにいる制服を着た学生がせわしなく動いている様子から察しがつく。朝のラッシュの時間だ。

（朝は降ってなかったんだけどなあ……）

ただでさえ憂鬱な月曜日は、激しく降る雨に飾られて鬱々とした色を濃くしていた。葉月は今日、傘を持ってきていない。かといって近くに傘を売っているような店はなかった。世の中そううまくいくものではない。

屋根伝いに歩くしかないと覚悟を決め、歩き出そうとしたそのとき、葉月は後ろから声をかけられた。

「あ、戸田。おはよう」

「橘君、おはよ」

葉月は自然に笑顔を浮かべ、和磨に向き直る。同じ時間の電車に乗っていたのか、朝の挨拶をしてきた和磨は、葉月の姿を見、なにか気づいた顔になる。

「もしかして傘持ってきてない？」

「うん、出るときは降ってなかったから……」

凶星の問いかけに、葉月はなぜか申し訳ない気持ちになりつつ答える。

「天気予報で降るって言うてたし。戸田、やっぱり抜けてる……」

「うん……」

和磨に言われて、再び小さくなる葉月は返す言葉がない。しかし今はそんなことを考えている場合ではなく、事態は一刻を争う。やはり屋根伝いに行こうと決め、先に行く旨を伝えようと葉月が口を開きかけたとき、

「ほら、俺の傘を貸すから」

笑顔すら浮かべて、和磨は自分の傘を突き出した。しかし、それでは和磨が被害を被ってしまうことは明白だった。

「え？ でも橘君、それしか持っていないでしょ……？」

葉月の言葉に、和磨は当然のように「まさか一つの傘で一緒に歩くわけにはいかないだろ」と答えるが、葉月は「でも……やっぱりいいよ、屋根伝いに行くから」と、できる限りやんわりと断る。

葉月は和磨の厚意を嬉しく思ったが、さすがに持ち主を差し置い

て、自分だけのうのと登校するわけにはいかない。それに少し行けば傘の売っている店があるはず。そこまで考えて、しかし彼女は大げさにため息をついた和磨に気づく。

「はあ……意外と意地っ張りだな。近くのコンビニまで一緒に行くとしますか」

葉月の視線の先、若干の苦笑を浮かべつつ、和磨は言い放った。そんな彼の様子に、葉月はもう反論する考えを失くしていた。

「あの、ごめんね」

「いや、仕方ないし。気にしない気にしない」

口ではそう言っているけど、やはり和磨は気乗りしないのだろう。葉月の目には、引きつっている彼の表情がはつきりと映っていた。しかしそれでも、自分に気を遣ってくれるのが和磨だった。歩き出した彼は、先に屋根の外で傘を差して待っている。

そんな和磨の親切に、葉月は胸が苦しいような、それでいて温かい気持ちを抱えつつ、彼の近くまで行って傘の下に入る。

「それじゃ、お願いします……」

遠慮がちに声を発して、彼の隣に並んだ。あまりにも近く、初めての距離だった。そして和磨は葉月が傘の下に収まっているのを確認すると、

「ん。コンビニまでの辛抱だ」硬い声で言った。

一つの傘の下、二人は歩き出す。

自分の肩が当たるか当たらないかというくらいの距離で、隣に並んでいる和磨は前を向いたままだった。そつと覗いた和磨の目には、入学式の日に見たのと同じ、なにかしらの強い意志と、動揺の色がある。

和磨に移した視線を元に戻しつつ、葉月は考える。先ほど和磨は、一つの傘で一緒に歩くわけにはいかない、と言っていた。やはりこんな自分とは嫌なのだろうか。そう考えると少し、気分が重くなる。沈んだ気持ちになり、自然と視線も下向きになっていく。すると突然、

「下向いてると、危ないだろ」

葉月の頭上から、声が聞こえた。いきなりかけられた言葉に、驚いて和磨の方を見る。するとそこには、少し長い髪の毛の下、彼の綺麗な目が真っ直ぐ葉月を見ていた。彼の瞳に映る自分の姿がわかるほどの距離だったために、当然目を合わせてしまうことになる。

「あ……うん」

答えつつも気まづくなり、二人とも同時に視線を逸らす。

雨は、止まりそうにない。

葉月は、いつもはこんなに近くにいることはないから、気づかなかった。和磨とは、随分身長に差がある。そしてなんとなく、彼に對して思ってしまった。

遠いな、と。

降りしきる雨の中、和磨は葉月と共に歩いていた。

（もしかしたら、声をかけなかった方がよかったかも……）

同じ一つの傘の下で和磨は、硬い表情を浮かべている葉月の隣で思う。声をかけた以上、自分は葉月をどうにかしなければいけない。もしかするとそんな自分の立場を考え、葉月は今一緒に歩いてくれているのではないかとさえ思う。そもそも声をかけなければ、葉月にこんなことをさせずに済んだのに、と。きっと彼女は、嫌がっているだろう。

しかし和磨は、そんなことよりも気になることがあった。

近くで見た葉月は、小さかった。

目を合わせた瞬間、和磨は思った。こんなに小さかったかと。こんなにも吹けば飛びそうな、淡い存在だったのかと。

考えつつ、朝から大変な状況の中に身をおいている和磨は、ぼんやりとしていた意識を視界に入ったコンビニに引き戻された。慌てて言葉を発する。

「あ、着いた」

「うん。本当、ありがとう。ちょっと待っててね」

葉月は傘から出て、コンビニの中へと入っていく。雨降る駐車場に一人残った和磨は、それでもう、彼女の近くにはいられないのだと実感した。

そうしていると、傘を買い、コンビニから走って出てくる葉月の姿が見えた。傘を差しつつ和磨の隣に並んだ彼女は、

「本当にありがとうね。さ、学校行こう？」

笑顔を浮かべつつ言った。その表情に、これまでの硬さはなかった。そのことに安堵と共に、なぜか一抹の寂しさを感じつつ言う。

「ん、了解」

自分はこれからも、今まで通りに彼女に接するだろうと思いつながら、和磨は学校への道を葉月と歩く。まだ春と呼べる季節の道は、四月のような薄寒さは消えていた。

雨が傘を打ちつける音を聞きながら、ふと和磨は隣を見る。傘しか見えないその視界の中、なんの前触れもなく傘を上げ、和磨の方を見た葉月と視線が合った。またもや気まずさから目を元の方向に戻すと、そんな雰囲気には耐えられなかったのか、葉月から声が聞こえた。

「ねえ。橘君はさ、どんな人に対しても優しいよね」

「なに？ いきなり恥ずかしいことを」

葉月が発した言葉の意味を、和磨は図りかねる。彼女はなにを言わんとしているのか。

「なんのために、そんな生き方するのかなって思ったから」

「なんの、ため……」葉月の言葉を、意味もなく反芻する和磨。

「うん、物事には理由が必要じゃない？ やっぱり相手から好かれるため？」

「いや、多分違うと思う」

その言葉の内容からは、彼女が自分のことを見てくれていたのがわかる。悪い気はしなかった和磨は、自分でも考えたことがなかった問いに、なぜか困ることもなく自然に答える。

「ただ相手に笑顔でいて欲しいから……って恥ずかしいな」

すんなり答えられたのが、葉月の前だからかどうかは和磨にもわからない。

「はは、確かに恥ずかしいね。でも立派だと思うよ」

「そんなもんか……？」

自分でも自覚できる苦笑を浮かべながら、和磨は視界の中の彼女を見る。微笑を浮かべて答えている葉月の、綺麗な黒髪が歩みに合わせて舞っていた。すると、葉月がさらに疑問を重ねる。

「そうだよ。それで、私もその中の一人だね？」

「そういうことに……なるか、な」

葉月の問いかけに口ではそう言ったものの、和磨は自分の中でのなにかが違う気がしていた。しかし明確な答えを出せるわけでもない。そんな違和感を感じながら、足は目的地に進み、学校の正門をくぐる。目の前に映る校舎を眺めながら、和磨は思う。

久しぶりの、激動の朝だったと。

葉月は窓際の席なので、考えごとがあるときや授業に集中できないときなどは、よく窓の外を見る癖がついていた。その癖に漏れず、今日も鹿児島北丸高校の二年生の教室の中、葉月はぼんやり外を眺めていた。

葉月が外を見ながら思うこと、それは今日の朝の出来事。

和磨に迷惑をかけてしまったこと、意外と背が高かった彼、そして自分の質問に対する和磨の言葉。

『そういうことに……なるか、な』

その言葉が示すことは、彼にとって葉月が他の周りの人間と同じように、笑顔でいて欲しい存在だということ。それは純粋に嬉しい。しかし逆を言えば、それ以上ではないということ。さらに言い換えれば、和磨にとって葉月は、彼の周りにいる普通な人。つまり、言ってしまうえば特別な存在にはなり得ないということだ。

そして、葉月は考えてみる。

この喪失感は何なのか。もはや否定も言い逃れも言い訳もでき

ない。ここまでくると、もう間違いない。その思いを確かめるように、葉月は心の内で言葉を紡ぐ。

（橘君が、好きなんだ）

彼がただの友達なら、ただ偶然学校で知り合っただけの人なら、こんなことを考えるはずがない。彼の些細な言葉に一喜一憂したりすることもないはずだ。

そう自覚した途端、葉月の中に身勝手な感情が渦巻く。

できることならこの恋を叶えたい。どうすれば彼を振り向かせられるか、彼にとって特別な存在になることができるのか。その思いは際限なく膨らみ、自らを侵食していく。しかしそれは、和磨の気持ち度を度外視した思い。彼の意味とは関係なく、葉月はどうしてもなく、和磨に対して勝手に望んでしまう。

自分を好いて欲しいと。

それは本当に自分勝手な欲望だった。相手のことなど考えない、自分から一方通行の思い。

しかしそれが恋なのだろう。

今までこんな感情を抱いたことがあっただろうか。振り返ろうとして、葉月は気づく。自分には振り返るべき過去がないことに。しかし今は、そんなことが気にもならないくらいに、和磨のことばかり考えている自分がいる。

葉月は記憶を失ってからしばらくの間、恋愛感情とは無縁であろうと思っていた。けれど彼は気づかせてくれたのだ。この、温かい感情に。この思いを、いつかは彼に打ち明けることができればいいと思う。しかし、まだそのときではないとも感じる。そのときがくるまで、自分は彼に対する感情を隠さなくてはいけない。

けれど、もしその選択をするのなら。

きっと自分は、今までの戸田葉月ではいられないだろう。なんとなく、怖い。自分が自分でいられなくなるということが。しかし、いつかそのときがくるまで耐え忍ぼう。

この思いがあれば、耐えられるはずだから。

しかし完全に自分の世界に入り込み、一人考えを巡らしていた葉月は気づいていなかった。先ほどから和磨に呼びかけられていることに。

気がつくとも目の前に、和磨の顔。

「……うにやつ！」

「やっと気づいたし。それにしても……またそれが」

葉月はひどく驚いた。今日の朝も近くにいたというのに、朝のときよりも顔の位置が近かった。なんとなく、葉月は自分の顔が熱い気がした。

「戸田さん、どうかしたの？ さっきからずっと呼びかけてたのよ？」

心配そうに覗き込んでくる舞に、照れ笑いを浮かべながら葉月は答える。

「ごめん、ちよつと考えごととして……で、なんだっけ？」

「一緒にお弁当食べよう、って話だよ」

そう言っただけは自分の弁当箱を掲げて見せる。どうやら葉月が考えごとをしている間に、昼休みになってしまったらしかった。

「うん、わかった。食べよう？」

前にもこんな風にぼーっとしながら昼休みを迎えたことがあったなと思いつつ、葉月は皆と一緒に昼食を広げた。

「戸田、よくそれで足りるよな？」

進一は葉月の方を見て言う。その進一の弁当は、葉月のものより少なくとも一回りは大きかった。

「進一は燃費が悪いだけだろ」

すると和磨が、相変わらずの皮肉の言葉を並べる。そこに流れるいつも通りの穏やかな空気が、葉月は心地よかった。

「うん？ 上原君、いつもそのお箸を使っていた？」

舞が指摘した穂の箸は、昔のキャラクターが印刷されたものだった。言われた穂が恥ずかしそうに笑うと、彼の長い髪が揺れた。

「うっん、間違えちゃったんだよ」

すると、横から物珍しそうに進一が顔を出す。

「それにしても稔、それ懐かしいじゃねえか。俺もガキの頃使ってたぜ」

「へえ、お前に幼少時があったとはな？」

間髪入れず、和磨が進一を横目で見ながら言った。その辛辣な言葉につられて、稔が笑い声を上げる。

「あはは、橘君、それきついよー」

そして進一がむっとしながらも、「当たり前だろ。和磨こそさぞかし生意気なガキだったんだろうな？」不気味な笑顔を浮かべつつ言った。

ゴールデンウィーク明けということもあってか、葉月はその会話を楽しいものだと感じていた。すると、次は稔が口を開く。

「そういえば橘君、子供の頃なんて呼ばれてたのー？」

「ん？ それ、答えないとだめか？」

答えた和磨はいつもと同じ表情をしているようで、よく見ると照れているのがわかる。そんな彼の珍しい様子をからかって、進一が言う。

「ちなみに俺は、シンイチ、だ。ほら、答えろよ」

「お前、まんまじゃないか。仕方ない、俺は……」

その言葉に、照れた表情のまま和磨は、そっぽを向きながら言う。しかし、

「……カズくん、だよ。笑っちゃうよな」

瞬間、葉月は視界が揺らぐのを感じた。

葉月の頭の中、情報が暴走する。

始業式の日に感じた、なにか。なぜか懐かしいと感じた和磨の、歌。そしてそのときに見えたばやけた少年の、姿。最後に、あの夢。

「戸田さん？ どうかした？」

「う、うっん。私、ちょっと……トイレ行ってくるね」

またもや心配そうに覗き込んできた舞に対し、そう言っ葉月は

席を立つ。今、これ以上この場に留まっていることはできなかった。
「ちよつと戸田さん……」

舞の声が聞こえたが、葉月はふらふらとした歩みで図書館へ行き、空いていた席に座る。

（最低だ）

今の今まで気づかなかった。自分は、そう、戸田葉月は……橘和磨を知っていたのだ。これで、今までの全ての出来事の説明がつく。葉月は思う。自分は幼少時に、和磨と知り合いだったのだ。夢の中で見た、引越しによってヨウちゃんと別れたときに自分が見ていた彼は、和磨だったのだ。こんな大事な記憶を自分はなくしたままにいる。

（なのに、私は……）

勝手に彼に想いを寄せていた。自分は彼を忘れていたような人間なのに。そんな自分に彼を想う資格など、あるはずがない。

葉月は途方に暮れる。自分はこれから彼とどう接していけばよいのだろう。こんな、酷いことをしていた自分は。彼を裏切るようなことをしていた自分は……。

姿勢よく席に座って、前方に向けられ、並べられた本の方向を見ている彼女の目には、なにも映っていないかった。

さすがに、あの様子はおかしいと思う。

和磨は葉月を探して歩いていた。彼女はトイレに行くとは言っていたが、あれは明らかにあの場を逃れるための口実だ。きつとどこかにいるはず。そう思いながら入った図書館で、彼女の姿を見つけた。

彼女と話をするため、座っている場所に近づく。

しかし近づくほどに、なぜか自分の知っている葉月ではないように思えてくる。姿勢よく座っている彼女は、ただ前を見つめていた。和磨は、その姿を純粹に美しいと思った。

しかしそれは、例えるなら彫刻のような美しさ。人としてはなに

か、大切なものが失われて抜け落ちてしまっているようで、和磨は不安を覚えた。その不安をかき消すように、それは杞憂であると自らに言い聞かせるように、葉月に話しかける。

「戸田、さっきはどうかした？」

「あ……橘君……」

やはりおかしい。人と話すときはいつも相手の姿が映っていた彼女の瞳は、ガラス玉のようになにも映していなかった。そんな彼女の様子に、和磨の中の不安は大きくなっていく。

「なにかあるなら、話して欲しいんだけど。ほら、俺ってそういう人間だから」

今自分がかかることのできる、精一杯の言葉。和磨がそう言うとき、葉月は視線を和磨から逸らし、ようやく瞳に感情を宿して言った。

「だめ……なんだよ……」

しかし彼女の目の色、表情が示す感情は、自責だった。初めて見る彼女の表情に、和磨は動揺する。なにが、なにが彼女を変えてしまったのか。先ほどまでいつも通りに話していたのに、彼女の内面になにが影響しているというのか。様々な考えが混じり合ったまま、和磨は葉月の真意を確かめるため、問いかける。

「だめって、なにが？」

すると葉月は、和磨の言葉にはっとした表情になり、一見するといつもの彼女に戻った。しかしそれは取り繕った笑顔だと、和磨にすらわかってしまうような偽物。

「ごめん、なんでもないよ。橘君、先に戻ってて」

「ん？ けど……」

「いいから。早く……行つて？」

葉月の浮かべる、深い苦しみの上に塗りつけられた、あまりにも弱々しい笑顔。そんな表情を見た和磨は、これ以上自分がここにいるのも、彼女を苦しめるだけだと理解してしまった。

「わかった。気が変わったら、俺にも話してくれ」

そう言つて和磨は席を立ち、図書館から出る。歩きながら和磨は

考える。

（また、なにもできないのか……）

自分の力では、彼女を苦しめることしかできないのだろうか。進一や稔のときのように、関係を壊すことしかできないのだろうか。きつと自分は、そんなことは耐えられない。どうにかして彼女の問題を解決に導いてやりたい。そのために和磨ができることは……。

舞の力を借りることだ。

自分には話せないのなら、葉月と同性の舞に頼むしかない。彼女ならきつと解決に導いてくれるだろうと、そう思った。

一応自分の中で考えをまとめた和磨は、ふとあることに気づく。彼女にまた元のように戻って欲しいと思うのは当たり前だが、なんとなく、気持ちがすっきりしない。こんなことは進一と稔のときにはなかった。彼女が記憶喪失であるから、必要以上に感情移入しているのだろうか。この状況ではそうとしか考えられないが、やはりすっきりしない。

しかし、視界の中に戻るべき教室を見つけた和磨は考えるのをやめていた。

教室に入ると、葉月の弁当を舞が片づけた後だった。

教室の中では、担任であり社会科を担当している河野が授業を行っていた。一応普通校である鹿児島北丸高校は文系の教科を幾つも学ばなければならない。しかし葉月は教師の声も上の空で、その目は黒板に向けられているが意識は別なところにあった。

和磨の後から教室に戻った彼女が考えていること——それは、和磨との今後の接し方についてだった。

葉月は先ほど、図書館で結論した。

自分に和磨を想う資格はないのだと。その結論はとても悲しく、自分の気持ちを抑えなければならないということを意味していた。しかし葉月が自分自身で決めたこと。これは守らなければならない。こんな気持ちでいる以上、自分はきつと和磨の近くにはいられない。

い。

きっと自分は、彼の小さな行動一つ一つに、胸を締めつけられる
思いを感じてしまうだろう。彼の近くにいたら、自制ができなくな
ってしまうだろう。隣に座っている和磨が視界に入るだけでも、苦
しい思いをしているというのに。

（ごめんなさい……）

心の中で謝ってみても、彼には届かない。そして自分はきっと、
彼に対して謝ることも許されないだろう。それほどのことをしてし
まったのだから、当然受けるべき罰なのだ。

これからはできるだけ和磨と距離を取らなければならない。さす
がに同じクラスなので、完全に彼を避けることはできなくとも、可
能な限り避けることにする。いつか、彼に許してもらえるまで。

滑稽な話だった。和磨は怒ってもいないし、彼は怒るべき事実自
体も知らない。しかし葉月にはそのことを彼に打ち明ける資格はな
い。いや、正確には勇気がなかった。

もし彼にこの事実を伝えてしまったら。記憶喪失である自分を普
通の転校生として扱ってくれた彼は……自分を普通の友達として見
てくれている彼は。なにより、こんな自分にすらにも優しくしてく
れた彼は。

きつと衝撃を受けてしまうだろう。しかし和磨のことだから、笑
って言うてくれるだろう。そんなことは気にするな、と。しかし、
それではだめなのだ。彼の優しさに甘えてしまつては。

和磨の大切な記憶。幼い思い出。それを自分は和磨と共有するこ
とができないのだ。そんな状態では、きつと心から笑うことはでき
ない。葉月も、和磨も。和磨に嫌な思いをさせること。それは葉月
が一番恐れることだった。それを避けるため、葉月は覚悟する。

もう、元には戻れない——この罰を受ける覚悟を。

「鎌田、頼みがある」

授業を終え、ほとんどの生徒が出ていった後の教室。一日の中で

最も時がゆつくりと流れる時間帯——放課後の教室は、夏が近づいたせいか、夕日の光は差し込んでいなかった。

「なに？ 橘君」

相変わらずの背中まである長い髪を揺らし、首を傾げて疑問を返すのは舞。

「ちよつと、戸田のことです」

一応、話を始める前に葉月がいないことを確認した和磨だったが、もう一度辺りを見回しながら短く言った。

「あなたなら別に、私の助けなんていらないでしょう？」

緩い微笑を顔に刻み、高校一年の途中からの和磨の友達である舞は、彼女なりに和磨のことを理解しているからこそその言葉を発した。

「いや、俺じゃだめみたいなんだ」

「なに？ 嫌われたの？」

少しだけ表情に心配の色を滲ませ、舞は問うてくる。

「いや、それもわかんなくて……。俺にはどうしようもない以上、頼れるのは鎌田しかないんだ」

懇願しながら、和磨は思う。今回、葉月のことについて自分は役に立てそうにない。自分の周りにいる人の力になれないことは齒がゆい思いがするが、他にも彼女の力になってくれそうな人がいてよかったと思う。

「まあ、別に断る理由はないわね。戸田さん、どうかしたの？」

「ああ、なにかしら悩みを抱えているようなんだ。悩みというか、戸田からは自責とか後悔のような思いが感じられたんだ。俺には話せないようだったし……。単に話せないだけなのか、俺を避けてるだけなのかはわからないけど……」

今日の昼に一緒に昼食を食べるまで普通にしていたのに、話をしているうちに急に席を外してしまった彼女。確か、和磨の子供の頃の呼ばれ方の話の直後だった気がするが、恐らくは関係ないだろう。

「わかったわ。今度話を聞いてみる」

「よろしく頼む」

和磨のときもそうだったが、舞は人の心の奥底を見極めることに長けている。彼女ならきつと葉月の力になってくれるだろう。話が終わったので、帰る準備を始めようと和磨が自分の鞆に手を伸ばそうとしたとき、

「橘君、あなた別になにもしてないわよね？」

いきなりの舞の声に伸ばしかけた手を止めるしかなかった。

「ん？ 別に心当たりはないけど……」

そんなことなど思いつきもしない和磨は、正直に言った。そんな彼を視界の中に捉えながら、舞は言葉を継ぐ。

「そう。もし戸田さんに嫌われていたらショックよね？」

「まあ、確かに。せつかくこうして同じクラスになったんだし……」和磨がそう言うと、舞は呆れたような顔になり大げさなため息をついた。そんな彼女のあからさまな様子に、和磨は慌てて問い返す。

「な、なに？ 俺、おかしいこと言った？」

「あなた、自分のことをわかってないでしょ」真面目な顔で、舞が言った。しかし当の和磨は、舞の言葉に全く心当たりがない。

「うん……？ どういう意味？」

そんな和磨の様子に、舞は諦めたのか、またもやため息をつく。

「はあ……。もういいわ。それじゃ、戸田さんのことは私がなんとかしてみるから」

「ん、頼む」

そう言う舞は自分の鞆を手にして教室から出て行った。和磨は舞の、自分のことをわかってないでしょ、という言葉について考えてみたが、まったく答えは出なかった。しかし、これで葉月も楽になれるだろう。今度こそ和磨は鞆を持って教室を出て、自分の家に帰るために足を動かした。

ただ、和磨は気づいていた。未だ自分の気持ちがすっきりしていないということに。

鹿児島北丸高校の教室、今和磨が出て行ったばかりのその部屋の

窓に、長身の男性の姿が映っていた。相変わらず逆立った白銀の髪、意志の強そうな顔立ち、地に着くほどの長いコート。それらで異質の雰囲気纏っているのは、九天だった。

普通ならまず場違いであろう彼は、夕日が差し込み始めたその場所ですでに窓の外――校庭を眺めるようにして、その漆黒の瞳を窓に向けていた。

そして次の瞬間、右手をなにもない虚空に掲げつつ言う。

「強い思い」

さらに、次は左手を掲げる。

「すれ違い」

最後に両手を払い、

「誤解」

低く、響く声で呟いた。

その、なにもかもを紅に染め上げるかのような黄昏の時。ちらほらと目立っている帰宅中の生徒たちは、なんの迷いもなくそれぞれの場所へと帰っていく。しかし九天には、それがない。校庭を見つめるその彼の瞳には、あるいは羨望の火が灯っているのかもしれないかった。

しかし、響く彼の声に抑揚はあっても、宿っている感情は少ない。「二人の進む道は、苦痛の別離なのか」

言うところ九天は、机の間を歩き出す。彼の視線の先には、教室の出入り口がある。

「世界から見ればちつぽけな存在の場所、この極東の地で」

前進を止めない彼は、やがて出入り口である引き戸に手をかけ、ゆっくりと開いた後に廊下へと出る。そして、

「ある二人の真実が、明かされようとしていた」

その言葉を最後に、小さな音を立てて引き戸は閉ざされる。

そこにはただ、静謐だけが存在していた。

第八章

桜の木が並び、風に吹かれて花びらを散らせている。

辺りには砂場や遊具が並んでおり、子供たちが大きな声を上げている。ある者は走り、またある者は砂場で遊んでいた。そこから少し離れた日陰になっている場所には、子供たちの保護者であろう大人たちが談笑している。

それは穏やかな光景、公園の日常だった。

その公園の中、いくつもあるベンチのうちの一つに腰かけている少女がいた。彼女はベンチに座っていて地面に届かない足をぶらつかせ、視線は公園の中で遊ぶ子供たちに向けられている。その目には幼いながらも、寂しさや孤独感が滲み出ている。

ふと、少女はうつむく。下を向いている彼女をよく観察すると、一つ、また一つと雫を落とし、足元の地面に染みを作っている。

彼女は、泣いていた。

なぜ皆は、一人でいる少女に声をかけてくれないのだろう。なぜ母親は、早く少女を迎えにきてくれないのだろう。

彼女は別に、友達がいなくても、母親に捨てられたわけでもなかった。ただ、運が悪かった。母親に待たせられている場所に、友達がいなかっただけだった。しかし、幼い少女には十分すぎる悲しみだった。広い世界にたった一人でいるようで。皆が自分のことを忘れてしまっているようで。

そうして下を向いていた彼女は、ふと自分の足元の影に、誰かの影が重なったのに気づいた。顔を上げると、そこには人のよさそうな笑顔を浮かべた、一人の少年が立っていた。彼は少女の顔を見、首を傾げて言う。

「もしかして苦しいの？」

少女はなにも言えず、ただ少年の顔を見続けていた。すると少年は少女の隣に座り、

「俺が、そばにいるよ」

笑顔で、告げた。それは無垢で、無二で、無窮の笑顔。彼の笑顔に、少女は驚く。そして彼女は最後に一筋の涙を流し、笑顔を返す。
「ありがとう」

すると少年は、覚えたてであろう平仮名を地面に書き始める。彼の行動を見ていた少女は、書き終えた平仮名を読む。

「たちはな、かずま。君の名前？」

「うん、そうだよ」

すると彼女は、少年と同じくらい眩しい笑顔を浮かべて言った。

「ありがとう、カズくん」

五月八日、火曜日。

昨日の雨は嘘のように爽やかに晴れ渡った空の下、携帯電話の激しい音に起こされ、葉月は目を覚ます。今日も変わらずに始まった朝。学校に行く準備を始めようとした葉月は、しかし自らの異常に気づいた。自分の頬に触れると、そこには乾き切っていない雫が残っている。

（そういえば夢を見た気もするけど）

しかし、今そんなことを考えている暇はない。少しでもいつもと違う行動をすると、学校に間に合わなくなってしまう。

葉月は準備を済ませ、家を出て駅へ向かい、電車に乗り込んだ。

この日は特にすることもなかったため、携帯電話を取り出し、自分の気に入っているサイトを見ることにした。

《君は言った。今はその時ではないと。》

僕は思った。君の言う通りなのだろうと。

けれど、一体いつになったら許されるのだろう。

今はまだ違う。明日も違う。それなら一週間後？ 一ヶ月後？

それとも、一年後？

こんな問いかけに意味はないことは知っている。

けれど、この気持もどうにもできない。

夢は夢、現実には幻だと君は言った。

僕はそれでもいい——その場所で、君と共にいられるのなら。
ねえ。

君に僕は必要ないのかな。

君は僕に必要なんだけど。

君の幸せを願うのは嘘じゃなくて。

けれど僕もユメを形にしたいんだ。

君と僕の幸せは相反するのかな。

それともおんなじものなのかな。

きつと、そのどちらかではないのだろうけれど。

僕は弱くて、その答えを聞いてしまうのが怖いよ。》

葉月は静かに、携帯電話を開いたことを後悔した。

ただの暇つぶしに眺めていた携帯電話。しかしその詩は、葉月に
今は考えたくないことを嫌でも考えさせた。そう、彼のことを。

朝から、苦しい気分だった。

「おはよう」

自分の席で進一や稔と談笑していた和磨は、隣に葉月が座つたの
に気づいて声をかけた。

「うん、おはよ……」

いつも通りに挨拶を返してくれた葉月の声。しかしその声からは、
なにも感じ取ることができなかった。いつもなら気だるさや、活気
などが感じ取れる彼女の声。今日のその声は、例えるなら機械から
出る音声のような、感情のない冷たいものだった。

そして葉月は持参した荷物を片づけると、すぐに立ち上がったど
こかへ行ってしまった。

（やっぱ、変だよな……）

葉月の背中を目で追いながら、和磨は思っていた。

「なあ稔、和磨はやっぱ変だよなあ？」

「うん、そーだね川上君」

すると、今まで和磨と一緒に喋っていた二人がわざとらしく棒読みで言った。

「うん？　なんだ二人とも」

自分のどこがおかしいというのか、和磨は二人の言っている意味が全くわからなかった。

「稔、絶対『あれ』だよなあ？」さらに進一が続ける。

「間違いなく橘君は『変』って漢字と間違えやすい『あれ』だよー」

しかし二人は未だに意味のわからないことを言い続けている。進一も稔も、なんとなくいやみったらしい笑顔を浮かべていた。

「なんだよ『あれ』って……」

そんな二人の表情に、不快感ではなく寒気を感じた和磨は、問う声を発した。その声に、稔が長い髪を揺らして振り向きつつ答える。

「ねえ橘君、君はなにか大事なことに気づいてないんじゃない？」

その言葉に、大げさに何度も頷いた進一が続ける。

「ああそうだ。舞からも聞いたがな、和磨は自分をわかってない」

「俺がなにに気づいてないって言うんだよ？」

誰かの力になったり、味方であるためにはまず自分自身をわかっていなければならぬ。確かに、自分の生きる意味を見失ったこともあったが、今はなにも心当たりはない。必死に考える和磨を見つづ、二人は微笑を浮かべて言う。

「和磨。自分の行動や気持ちをよく考えてみるんだ。それらは本当に、自分で理解しているようなものであるかをな」

「うん、人から教わっても意味はないよ」

友人二人がここまで言うのなら、自分は本当になにかを見逃しているのだろうと和磨は思う。時間を見つけて自分を深く省みることに決める。

「そうか、わかったよ」

話が終わると、チャイムが鳴り今日一日が始まる。いつの間にか隣に戻ってきた葉月。相変わらぬ無表情、いや、内に渦巻く感情

を必死で抑えつけているかのような彼女を視界の端に捉えながら、和磨は思う。

（戸田は、大丈夫だろうか……）

あるファミリーレストランの中、多くの利用客の中に混じって制服を着た女子高校生が二人、向かい合って座っている。二人の近くの壁には壁時計がかかっており、その時計が示す時刻は七時二十分。外の風景からして、午後であることがわかる。

（話って、なんだろう……）

二人の女子高生のうちの一人、葉月は思う。彼女がここにいるのは、目の前に座っているもう一人——舞に呼び出されたからだった。「さて、と……」

舞は口を開くと、頬杖をついて穏やかな表情になった。なんとなく、葉月は自分の全てを見透かされているような気がした。

「戸田さん、あなたどうしたの？」

「どうしたのって、なんの話？」

確かに今の自分はいつもとは違う。それは自覚しているつもりだったが、あまり自分から認めたいものでもない。葉月はなんとか舞の視線に耐えつつとぼけた。

「橘君も心配してたわよ？　あなたが変だってね」

「橘君が……？」

和磨が自分のことを心配してくれていた——その事實は、葉月の心を揺らがせる。彼への想いをしまっておこうと決意した、葉月の心。

「ええ。それで、見たところあなたは橘君を避けようとしているわね？　それはどうして？」

舞の全てを見透かす視線を受けながら葉月は考える。彼女に全てを説明するべきだろうか。このことを人に全て話せば自分は、少しは楽になるかもしれない。しかし、本当にそれでいいのだろうか。それは、人に甘えることになるのではないか。

すると、葉月の思考を読み取ったかのように、舞は告げる。

「戸田さん、あなた今苦しいでしょう？」

「え……」

凶星の言葉に、葉月はまともに返事を返せない。それどころか、わずかに発した声すら震えてしまっていた。

「私にはわかる。あなたの橘君を避ける苦しみが。あなたは好きでそうしているわけではないんでしょう？」

「舞ちゃん……ありがとう」

葉月は思った。彼女は自分のことをわかっていてくれるのだと。そんな舞に対して、人に甘えるなどと考えるのは失礼だろう。

そして葉月は説明する口を開いた。自分が気づいてしまった、葉月と和磨は共通の時間をもっていたという事実を。

「そう……それで橘君を避けていたのね」

「うん。だめなんだよ、こんな私が近くにいちや」

全てを話し、やはり自分の業の深さを実感した葉月は、うつむきつつ言葉を区切った。そして舞からの救いの言葉を求めている自分を、深く心の内で罵った。^{ののし}しかしそんな彼女の思いも、

「ねえ戸田さん、あなた橘君のこと好きでしょ？」

いきなりの舞の言葉によって吹き飛ばされた。

「ふえっ？ え、あのっ、その……」

そんなことを、面と向かって人に言えるような葉月ではない。無難に否定しておけばよかったものを、舞に嘘をつくという後ろめたさからできず、かといって素直に肯定もできない。ただあやふやに場を繋ぎ、誤魔化すような言葉を発した。そんな彼女の様子を見ていた舞は、微苦笑を浮かべて口を開く。

「別に、隠さなくもいいじゃない。まあ要するに、やっぱりあなたは馬鹿ってことね」

彼女は、ふふっ、と笑いつつ言った。舞の、あなたは馬鹿、という言葉にいつかの情景を思い起こしつつ、葉月は嘆息しながら答える。

「また、馬鹿呼びですか……」

「そうよ。好きだったら告白する、嫌いなら避ける。これ以外になにかあるの？」

舞はいとも簡単に言ってくれる。そうまくいかなないから、こうして悩んでいるというのに。しかし葉月は彼女を疎ましくは思わない。舞の言っていることは正論だし、なにより葉月自身が、そうできたらいいと思っているのだから。

「舞ちゃん、そううまくはいかないんだよ」

「いいえ、うまくいくわ。それに言いにくいけど……」

まさに言葉の通り、舞は顔を歪めている。その表情は、人を苦しめることに胸を痛めて怯える顔であり、葉月への心配の色を含んだ表情だった。

「なに？ 気にしないで言って？」

そんな舞の本心が聞きたくて、いや、彼女の言葉に救いを求めて、葉月は先を促した。その言葉に、舞は怯えの色を消し去り、厳しい表情で言葉を継ぐ。

「戸田さん、あなたは責任を取らないといけないんじゃないかしら。あなたが彼のことを忘れていたということの責任を。私には戸田さんが、逃げているようにしか見えないの」

「あ……」

その言葉に、呆けたように口を半開きにする葉月。

確かに、舞の言う通りだった。自分は逃げていただけではないのか。和磨に嫌な思いをさせたくないと言い訳をして、自分のいいように解釈して。結局、非があるのは自分なのに。体は止まったまま、しかし頭の中は回転していた葉月は、一つの結論を出す。謝らなければならない。

それは当然のことで、自分の責任だった。

「舞ちゃん、ありがとう。私、橘君に謝るよ」

今浮かべられる精一杯の笑顔を自らの顔に刻んで、葉月は舞に笑いかける。この表情が、舞への感謝の証として一番相応しいと思っ

た。

すると舞は得心した顔になり、「そう。それならよかったわ。それで、いつ謝るの？」と問うてきた。微笑すら浮かべている舞に、葉月は最良の答えを返す。

「今から行くことにするよ」

「今から……？ まあ、確かに早い方がいいわね」

あまり見られない驚きの表情を浮かべた舞は、その数瞬後にはすぐに元の微笑に戻っていた。「それじゃ……」と言いつつ立ち上がった葉月に合わせ、舞いも席を立つ。二人で会計を済ませ、外に出る。以前葉月は和磨の家に行ったことがあったので道は知っていた。「じゃあ舞ちゃん、ありがとうね」

「ええ、がんばりなさいね。それと……」

強い風が吹き、二人の髪を揺らす。それは、心の中のもやもやを吹き飛ばすような、爽やかな夜風だった。

「ついでに、告白しちゃえば？」

「な、なに言ってるの……！ そんなことできないよっ」

舞に別れを告げ、葉月は歩き出す。今の葉月の心を映すかのように雲一つない空には、星が輝き始めていた。

街路樹が並んでいる道を、和磨は歩いていた。そこは明らかにいつも通っている道ではなかった。和磨はあることをするため、わざわざ遠回りをしてまでそこを歩いていた。そのあることとは、

（俺が気づいていないこと……）

今日進一や稔に指摘された、自分自身のことを考えてみるためだった。

一体自分は、なにをわかっていないというのか。

とりあえず、二人に言われたときの状況を思い出してみる。確かそのときは、葉月が登校してきて教室を出ていったとき。その名前を、もう一度頭の中で反芻してみる。

戸田葉月。

葉月のことについて和磨は考えてみる。最近彼女はおかしい。朝の態度から見ても、明らかに自分を避けている。それはいいことではなく、むしろ悲しいことだった。

（クラスメイトに避けられるのは、嫌な感じだし）

なにかしらの問題を抱えているのなら、早くその問題が解決できればいいと思う。どんな人でも、笑顔でいるのが一番いいに決まっているから。

しかし、このすっきりしない気持ちはなんなのか。葉月のことを考えていると、毎回もやもやしてはつきりしない感情が渦巻く。そんな感情の根源を探るため、今まで見てきた、恐らくはこのもやもやの原因であるだろう彼女を思い描く。

始業式の日、初めて会った葉月。

髪が綺麗で、記憶喪失で、どこか儚くて。そして、思ったよりも小さくて。

あのとき、一つの傘の下で一緒に歩いたとき。自分は本当はなにを思ったのか。小さくて、吹けば飛びそうだった彼女を見て。そう——彼女を放つては置けないと思った。記憶喪失という大きな問題を抱えながらも、それでも普通に生きようとしていた彼女を。

支えてあげたいと思った。守ってあげたいと思った。

（これではまるで……）

自分が葉月のことを好いているようではないか。しかし、そう考えると今までの自分の行動や気持ちに矛盾がないことに和磨は気づく。そしてさらに考える。

進一と稔の関係が悪くなったとき。葉月からメールをもらったり、彼女が彼らの仲直りのために涙を流してまで説得したと聞いたときの気持ちは。雨の中、一緒に歩いている彼女を見たときの思いは。そこまで考えて、やっと気がつく。そう、自分は……。

（戸田葉月が、好きなんだ）

失ってしまった記憶のことについて、自分と葉月は考え方が違う。それどころか、同じものなんてないのかもしれない。しかし和磨は

思う。相容れないからこそ、相手をわかりたいと願うのだと。

そして彼女に対してだけは、他の人とは違う。和磨は笑顔でいて欲しいからという以上に、自分勝手なことだが、自分が彼女を好きだから優しくしていたのだ。

「なんてことだ……」

思わず声に出して言ってしまった和磨は、自分の携帯電話が着信を知らせているのに気づいた。取り出して見てみると、和磨の兄、明からだった。

『――』

橘家にベルの音が響く。葉月が正面玄関の扉の横にある、小さな呼び鈴のボタンを押した感触を確かめていると、ほどなくして人の足音が聞こえてきて、ドアが開く。

「こんにちは、初めまして。私、鹿児島北丸高校に通う戸田葉月といます。橘……その、和磨君はいらっしゃいますか？」

挨拶をしつつ、応対に出た人物を見る葉月。目の前に立っている人は男性で、二十代前半といったところ。その顔はどことなく和磨と似ており、彼の兄であることをうかがわせる。

「おう、和磨の友達だな？ 今はいないが……中で待ってるか？」

「はい、そうさせていただけると嬉しいです」

そう言って、葉月は橘家に上がる。彼女は廊下を歩いて、居間に通された。

「それじゃ、あいつに連絡とってみるから、ゆっくりしていれくれ」

「はい、ありがとうございます」

何日か前に来たときと変わらない、落ち着いた感じの居間。歩みを進めたそこには、一人の女性が座っていた。その女性が、薄紅色に彩られた口を開く。

「こんにちは」

女性は二十代前半のような見た目で、肩にかからないくらいの長さで切りそろえられた髪がとても似合っている。整った顔立ちから

は大人の女性特有の気品が感じられ、葉月は少しの居心地の悪さを感じつつ、声を発する。

「初めまして、戸田葉月といます」

「私は畠中里香よ。さっきの人の、彼女です」

そう言って笑った彼女からは、わずかに香水の香りがした。

「そうですか……」

そう言いつつ葉月は腰を下ろし、思う。和磨はまだ帰ってきていないようだが、こんな時間に来たのは迷惑だったのではないか。そもそも、彼に会ってなにを話せばいいのかも見当がつかない。そうやって考えごとをしている葉月の耳に、里香のよく通る声が響いた。

「ねえ葉月ちゃん、あなた恋してるでしょ？」

「ふえっ？」

萎縮しきっていた葉月は、情けない反応を返してしまっていた。

「私にはわかるよ、そんな顔してるもの。でも、なにか悩んでるみたいね？」

顔を見ただけで、そんなにわかってしまうのだろうかと疑問を抱きつつ、葉月は彼女の瞳に、どこか舞に似たものを感じ取っていた。その瞳はとても穏やかで、自分の全てを包んでくれる気がした。そんな思いからか葉月は、次の瞬間には自身の不安を言葉にしまっていた。

「あ、はい……。そもそも、自分勝手じゃないかって思うんです」

人を好きになるということ、それは相手のことを独占していたいという感情、悪く言えば欲望でもある。そんな自分勝手に許されるのだろうか、葉月は思っていた。

「そうね……でもいつかは、相手のことを思いやれるようになる」

その言葉を否定しなかった里香は、葉月にとっては意外な言葉を発した。

「え？ そんなんですか？」

「今のあなたの状態は恋でしょ？ 恋が愛に変わればね、そうなるのよ」

笑顔を浮かべつつ説明してくれた彼女の言葉は、葉月にはわからなかった。その難解さに顔を歪めて、「難しいです……」と返すのが精一杯だった。

目の前に座っている里香は、大人の人だ。いつかは自分もこうなれるのだろうか、嫌でも考えてしまふ。しかし、もしそうなれば、今彼女が言ったことも理解できるようになるのだろうか。

「そうね、いっぱい悩みなさい。あなたはまだ子供だから」

そう言っただけで里香は微笑する。女性である葉月から見ても、それは魅力的な、自分の全てを許してくれるかのような笑顔だった。

そんな話をしていると、奥の方から先ほどの男性が出てくる。「悪いが和磨はまだ帰らないってよ。どうする？」

そもそもなんの連絡もなしに押しかけたのは自分だったので、都合が合わないのは仕方がないこと。葉月は帰ることにした。

「それじゃあ、私帰ります」

葉月は玄関まで行き、二人に挨拶をする。

「変な時間にお邪魔して、すみませんでした」

深く頭を下げた葉月に、目の前の二人はそれぞれに柔らかい顔で答える。

「いや、いってことよ。まあ、和磨と仲良くしてやってくれ」

「葉月ちゃん、がんばるのよ」

その二人に「はい」と笑顔で答えた葉月は、背を向けてドアノブを掴み、外へと出る。

「ありがとうございました。それじゃ、私はこれで」

最後にそう告げて、静かにドアを閉めた。

葉月はそこで、夜の冷たい空気を感じた。和磨に会えなかったのは残念だったが、今度の休みの日にでもちゃんと話をしようと決める。

一人、夜道を歩く葉月の足取りは軽かった。

見慣れた道を歩いて、自分の家に辿り着く。ドアを開けて中に入

ると、居間には明が座っていた。

「よう、遅かったな」

橘家の居間には、夜のゆっくりとした時間が流れていた。

「兄貴、さっきはなんで電話したんだ？」

先ほどの明からの電話は、いつ帰るのかと問う内容だった。そのときはまだ時間がかかると答えたが、電話を切った後でなぜそんなことを聞いたのか、和磨は気になっていた。

「ああ。確か戸田……葉月とかいう娘が来てたんだよ」

その言葉に、和磨は息を詰まらせる。

「な……、戸田がつ？」

「どうした、なにを慌ててんだ？」

好きだと自覚した途端、和磨は彼女の名前に対して敏感になってしまっているのかもしれない。恨みの色を加えて、自分の兄に向かって呪詛の声をあげる。

「兄貴、どうしてそれを言わなかったんだよ……」

「だって、聞かなかったじゃねえか」

彼の有無を言わさぬ正論に、言い返せないこと自体と、言い返せない自分自身に和磨は腹が立った。

しかし葉月が来たということは、やはりなにかしらの用事があったに違いない。すれ違ってしまったことに気分を重くしながら、和磨は自分の部屋へ入る。

することもないので、なんとなく携帯電話をいじってみる。するとメモ帳には、「葉」という字が保存してあった。

（俺は、戸田のことが好きだ）

先ほど和磨は自分の気持ちを自覚したばかりだったが、それはそんなに受け入れられた。いつか、この想いが彼女に伝えられればいいと思う。と、先刻から彼女のことばかり考えている自分に苦笑し、和磨は首を振る。携帯電話を机の上に置いて、思考に一区切りつけると、ふと目の前にある写真立てに目が止まり、手に取って眺める。

それは、少年と少女が手を取り笑って写っているものだった。その和磨の頭の中、古い記憶が蘇る。

幼い頃の恋、今ではそのニクネームの由来すら覚えていない、ヨウちゃんとの約束。守らなければならない盟約。果たさなければならぬ誓い。和磨はそれを、ひとときも忘れたことはなかった。

あの、引越しの日。和磨は両親の仕事の都合から、ここ鹿児島に引っ越すことになった。それは当然、別れを伴うものだった。幼い頃に出会ったヨウちゃんとは、よく遊んだものだったが、まさかあんな別れ方をするとは思ひもなかった。

それで、約束を交わした。

しかし今は、葉月のことを考えるだけで精一杯だった。そういえば、舞は上手くやってくれたのだろうかと思ひ出す。先日、和磨は彼女に葉月と話をして欲しいと頼んだ。今思えば、その行動すらも自分の彼女に対する気持ちからだとわかる。しかし、自分の気持ちをとにかく言う以前に、葉月には自分の問題を解決して欲しかった。なにかしらのもやもやを抱えながら、日々を過ごすことはとても辛い。

そうやって考えごとをしていた和磨は、突然の携帯のメール受信の音に驚く。

「わっ」

気づいたときには、手にした写真立てを床に落としてしまっていた。安いものなので、すぐに写真が中から飛び出してしまう。

「……！」

それを拾おうとした和磨は、しかし動きを止めていた。床に落ちている写真は裏返っており、そこには名前が書いてあったのだ。一つは「たちばなかずま」とある。そしてもう一つは――それは、和磨の見知った名前。

先ほど届いたメールは舞からの、葉月の悩みを解決した、という内容のものだった。

日付は、五月十二日土曜日。辺りに人はいないが、樹木やベンチなどがあり、そこが公園であることを示している。和磨はそこに、一人の女性と向かい合って立っていた。風になびいて煌く彼女の髪を見て、純粹に綺麗だと思い、少し伸びたんだな、とも思う。

そこで二人が相對しているのには理由があった。先日の夜、和磨には葉月に伝えなければならなかった。そのことを学校で葉月に言くと、彼女も謝らなければならなかったらしい。そこでお互いの都合がいい日——今日を会う日としたのだった。

「橘君、私謝らないといけないことがあるの」

そう言った葉月は、少し暗い表情をして続ける。「私ね、よく夢を見るんだ」

「夢？」和磨は問い返す。

「そう。カズくんっていう男の子と、ヨウちゃんっていう女の子が別れる夢」

どこか遠い場所を見つめるような、懐かしいが辛い過去を顧みているかのような、儚げで、しかし決して後ろ向きではない葉月の表情。そんな彼女の言葉に和磨は驚き、言葉を発する。

「それ、って……」

「聞いて？」

しかし和磨の言葉を遮った葉月は、とりあえず自分の話を最後まで聞いて欲しいようだ。その彼女の意味を尊重し、和磨は押し黙る。「その夢は、かつて私が見た出来事なんだって思ってた。でも記憶喪失だから、確かめる術はなかった。そして私は、気づいちゃった……」

葉月の声は、先刻の彼女のそれとは一変し、今にも泣き出しそうなものだった。しかし和磨はそんな状態だからこそ、彼女に先を促す。「なにに、気づいたんだ？」

少し間を空けて、葉月は意を決したように言う。

「橘君が、その男の子だったことに……！」

それを皮切りに、葉月の声や口調は激しいものになっていく。

「私、橘君にひどいことをしてたっ！ 私と橘君は昔知り合いだったのに、あなたのことを忘れてしまっていたの……！」

葉月の様子に、和磨は思う。あまり、直視できるものではないというより、見ていられないと。和磨は、彼女がここまで取り乱している様子を見たことがなかったからだ。しかし、胸の内には温かい感情が宿っている。彼女の言葉一つ一つが、和磨の心に刻まれていく。

「自分勝手なのはわかってる。でも、橘君には嫌われたくないの。お願い……」

すぐるような目で、葉月は和磨を見て言った。

「カズくんやヨウちゃんを忘れてしまっている私を、許して下さい……」

しかしその言葉を聞いた和磨は、

「それは違う……！」

思わず叫んでしまっていた。

「えっ……？」

いきなりの和磨の言葉に、葉月は驚いていた。自分は、とても酷いことをしていた。それを今謝った。許しを得たいと言った。それのなにが違うというのだろうか。自分は確かに、彼との記憶を失くしているというのに。和磨の必死な表情と相まって、葉月の中に僅かではあるが、確かな不安が生まれていく。

「戸田、それは間違ってる。戸田は、ヨウちゃんを忘れたんじゃない」

「え？ でも私は……」

言い淀む葉月の視界の中、和磨は一度目を伏せ、躊躇していた。まるでこれから告げる真実を、本当に伝えてよいものなのか迷っているかのよう。

しかし顔を上げた和磨は、真っ直ぐに葉月を見つめ、口を開く。葉月はその瞳を見て、いつか見たものと同じ強い意志を感じ、そし

て、ただ純粹に、綺麗だなと思った。

「ヨウちゃんは、戸田のことなんだ」

「え……」

瞬間。記憶が蘇る。

彼と出会ったときのこと。

彼と遊んだときのこと。

そして彼と別れたときのこと。

それから失意の日々と、立ち直ったときの思い。

そして事故のときの、身を裂かれるような痛み。

打ちつけた体の痛みではない。強く衝撃を受けた頭の痛みでもない。ただ、自分にとって大切に無二のもの——記憶を失ってしまう痛みを。

「う、あ……」

葉月は自分が涙を流しているのを感じる。その涙の意味もわからず、流れてくる記憶の洪水に、足元がふらつく思いがした。

なにも考えられない。ただ今はなにかに、なんでもいいからなにかにすがっていたかった。そして目の前にいる和磨に、葉月はただ救いを求め、視線を向ける。すると和磨はゆっくりと、しかし確かな言葉を紡ぐ。

「俺はやつと気づいた。相手に笑顔でいて欲しいから人に優しくするけど、戸田だけは違うんだ」

彼がなにを言わんとしているのか、葉月にはなんとなくわかる。その身勝手な予想に、隠せない喜びを抱いて舞い上がりそうになるが、今の葉月にはそんな余裕がない。

（だめだよ。それ以上言っちゃだめ……）

葉月は感じる。これ以上なにかが自分の中に入ってきたら、きつとおかしくなってしまう。しかし和磨は告げようとする。

「戸田、俺は——」

その、彼の優し過ぎる声音を、
「だめっ」

葉月は思わず遮っていた。葉月を気遣い、ただただ温かい、彼の言葉を。

「今なにかを言われたら、私は、私じゃなくなっちゃう……」

そう言つて、葉月はうつむく。和磨と出会つたあの日のように、彼女の雫が地面を濡らす。すると顔は見えないが、和磨の強い声が聞こえた。

「今度会うときは……」

「……？」

驚いて葉月は考える。今和磨が言つたものは、夢の中のカズくん
の言葉。何度聞いても絶対に聞こえなかった、彼の声。でも今なら、
聞こえなかった声も思い出せる。気づいたときには、葉月は下を向
いたまま彼の言葉を、彼の代わりに、静かに告げていた。

「一緒に……手を、繋いで……」

流している涙に声を震わせながら、葉月はしかし、しっかりと言
葉を紡いだ。そう言つた葉月に、和磨は驚いたようだったが、彼は
意を決したように言葉を続ける。

「未来を見ると約束する……！」

きつとぐちゃぐちゃになっているであろう自分の顔を隠しめせず、
葉月は顔を上げ、言い終えた和磨の表情を見る。そこにはただ相手
を思う、凜々しい表情があつた。

「ドラマの受け売りだけだな」

そんな顔には、勝てない。

「ずるい、よ……」

葉月泣きながら笑っているという、いつかの和磨のような表情を
浮かべていた。しかし彼女の内にある感情は、あのときの和磨のも
のとは全く違うもの。そんな内心で呟いた葉月の頬を、また一筋の
感情が流れ落ちる。

「今まで悪かった。戸田、今こそあのときの約束を果たそう。いや、
あのときの約束だけじゃない……今ここにいて、橘和磨としての、
素直な気持ちを伝えるよ。俺は……」

和磨の手が伸び、葉月の頬に触れる。下手をすれば伝わってしまうのではないかと思うほど、葉月の顔は上気している。そして優しいぬくもりを伝える彼の手は、葉月の涙を優しく払った。

「戸田葉月が好きだ」

せっかく和磨が払ってくれたのに、葉月の顔には笑顔と一緒にまた涙が溢れてくる。どうしようもない、ただただ彼を大切だと感じる自らの心を抱えながら。

葉月はきつと、この瞬間を忘れないだろうと思った。

「私も……大好き」

目の前にいる大切な人は、あの日と変わらない、優しい笑顔を浮かべていた。

互いに向き合って笑い合う、橘和磨と、戸田葉月。彼らのいる公園で、彼らに背を向けて歩く長身の男性——九天は、一人靴音を立てていた。

たったその程度の事実すら再確認しなければならぬほどに、彼の姿は目立ち、異形とも呼べるものだった。決して老いからではない理由から白銀に染め上がった頭髪を逆立て、顔には意志の強そうな凛々しい表情を刻み、裾を地面で擦ってしまうほどの長さを誇る漆黒のコートをためかせて歩く九天は、その表情にどこか安堵の色を浮かべていた。

そんな彼の口から、抑揚があり、男性だとわかるがどこか事務的な低い声で、言葉が紡がれる。

「やれやれ、私もようやく物語の語り手の役目から降りられるな」
疲れ切った、という印象の言葉とは裏腹に、九天の凛々しい顔には微苦笑が刻まれている。それは彼の言う語り手なる役目を負担だと理解しつつも、どこか楽しんでいたことを示しているようだった。さらにその表情を隠そうともせず、彼は言葉を継ぐ。

「ようやく明かされた真実。これからもお互いを思いやる心があるのなら、二人はきつと……くく……」

独白どころか、一人で笑いすらもらす九天に、道行く人々は気づきもせずに歩いていく。九天という異物は、この世では明確に認識されない。

公園を出た彼が進むのは、街路樹の並ぶ歩道。隣を走る車道には、大小様々、色とりどりの自動車が走っている。そんな自動車に、わずかに響く靴音を掻き消されながら九天は歩き続ける。

「この物語の語り手としての役目は終えた。これから先は……」
くくつ、と喉を鳴らし、九天は告げる。

「そう、お前たちが物語を紡ぐといい」

静かな笑い声を上げながら歩く彼の背中では、次第に薄れて見えなくなつた。

エピソード

「お邪魔しまーす」

後ろについてくる四人を案内しながら、居間に自分の兄の姿を見つけた和磨は、思わず言ってしまう。

「げっ」

そんな彼の言葉に、談笑していたらしい明は不服そうに口を尖らせる。

「なんだお前、兄の姿を見た途端それはねえだろうが」

「ほら明、私たちは席をはずすわよ？」

そう言ったのは明の隣に座っていた、優しい顔をした里香だった。気がきくところを見ても、やはり自分の兄には似合わないと思いつつ、和磨は礼を言う。

「すみません、助かります」

「まったくだ、もっと謝れ」

なぜか偉そうに鼻を高くしている、和磨にどこか似ている顔を持つ明を引っ張りながら、里香は葉月に向かって、

「おめでとう、がんばってね」

と言い残し、橘家の居間を後にする。その姿を見届けた後、空いた居間に全員を座らせて、和磨は一息つく。

「あーあ、一人だけのけ者だなあ」

そう言ったのは、幼さの残る顔を苦笑に歪めた稔だった。しかし彼の態度には、言うほどの不快感はなかった。すると、

「俺と舞。和磨と戸田だもん？ お前もがんばれよ、稔」

本当にそう思っているのかどうかかわらないような口調で、その強面の顔に笑顔を刻んだ進一は言った。

「そうね。戸田さん、おめでとう」

自分のことのように喜び、祝福の言葉を贈ったのは、全てを包み込むような雰囲気を持ち、長髪を揺らしている舞。そして、

「えへへー、照れるよー」

髪の毛を触りながら珍しくはにcanでいる、守らなければなら
ない存在となった葉月を見ながら。

和磨は自分でも気づかないうちに、優しい笑みをこぼしていた。

高く晴れ渡った空、どこまでも続くその場所に、低い声が響き渡
る。

「これからも時間は変わらず流れ続け、世界は動きゆく。変わらな
いものなど、この場所には一つとしてない」

世界に響いている声。全ての生命を慈んでいるかのような、穏や
かな呟き。

「しかしその変化を受け入れていくことができるのなら。人として
の最大の義務——後の世において後世の人間に自分たちが生きたし
るしを残すことを……」

そしてどこか、羨んでいる響き。

「未来の跡を、作ることができるだろう」

彼が言った。

「ずっと、そばにいていいか？」

彼女は頷く。

「もう、忘れないよ」

そこにあるのは——幸せ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747i/>

未来の跡

2010年10月8日15時57分発行